



“ミュージアム・リレー” 10周年記念行事

目 次

【特 集】

- 〈全体報告〉
- 〈開会挨拶〉

- 〈挨拶〉

- 〈記念講演〉

- 〈閉会挨拶〉
- 〈報告〉

- 〈講演〉
- 〈事例発表〉

- 〈ミュージアム・リレーに参加して〉

JMMA理事・関東支部幹事 奥野花代子	2
“ミュージアム・リレー”10周年記念実行委員長 菅井 清登	4
JMMA関東支部長 倉本 昌昭	5
JMMA顧問 濱田 隆士	5
星槎学園高等部湘南校 校長代行 結城 卓彦	6
星槎学園高等部湘南校 在校生代表 松日楽 美幸	7
JMMA会員 文部科学省生涯学習政策局社会教育課 栗原 祐司	8
JMMA理事 東京大学・大学院教育学研究科・教育学部 鈴木 真理	14
神奈川県立生命の星・地球博物館 館長 斎藤 靖二	16
箱根ガラスの森 館長 岩田 正崔	17
“ミュージアム・リレー”10周年記念実行委員長 菅井 清登	18
箱根町立郷土資料館 館長 大和田 公一	20
JMMA常任理事・実践部門部会長 高橋 信裕	21
慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス 上山ゼミ 田村 修己・堀内 香那・山高 一雄・吉田 洋基	22
JMMA会員 千葉県教育庁教育振興部文化財課 新 和宏	24
JMMA理事 川津 尚一郎	27
小田原城天守閣 湯浅 浩	28
林原自然科学博物館 井島 真知	29
JMMA会員 東京大学・大学院教育学研究科 大木 真徳	30

【掲示板】	31
【インフォメーション】	32

特 集

JMMA関東支部および実践部門は、去る、2007年9月8日から9月9日にかけて開催された神奈川県西部地域ミュージアムズ連絡会（WESKAMS）の“ミュージアム・リレー”10周年記念行事に共催したので紹介します。

〈全体報告〉

日本ミュージアム・マネジメント学会
理事・関東支部幹事 **奥野花代子**
(神奈川県立生命の星・地球博物館/
神奈川県西部地域ミュージアムズ連絡会事務局)

「神奈川県西部地域ミュージアムズ連絡会」(1996年7月発足)は、1997年10月から毎月1回、持ち回りで“ミュージアム・リレー”と名付けた連携活動を行っています。それが、2007年9月8日の神奈川県立生命の星・地球博物館の第120走(回)目の開催で、満10周年を迎えました。

日本ミュージアム・マネジメント学会(JMMA)関東支部及び実践部門は、同日午後から翌9日にかけて計画された「ミュージアム・エデュテインメント〔博物館楽修〕」をメインテーマとした「“ミュージアム・リレー”10周年記念行事」に共催しましたので報告します。

JMMAは、これまでも同第50走達成記念行事(2001.11.22~23)及び第100走達成記念行事(2006.1.14~15)を共催した他、“早春の箱根”にて「美術館のCS戦略を学ぶ」(2003.3.8~9)と題した関東支部及び事業戦略部会とミュージアムショップ部会の研修会場として、加盟館園施設を利用した実績があります。

今回の行事は、神奈川県博物館協会ならびに神奈川県立生命の星・地球博物館友の会の後援も得て、WESKAMSの実行委員会が中心となり、加盟館園の協力で行われました。

“ミュージアム・リレー”を含めた2日間にわたる行事には、JMMAとWESKAMSの会員をはじめ博物館関係者、一般の方など延べ310名の方が参加されました。

次に、当日の“ミュージアム・リレー”と「10周年記念行事」の概要を簡単に紹介します。詳しくは、このページの後をご覧ください。

○ 2007年9月8日(土) 10:00~11:30

第120走 “ミュージアム・リレー”

(参加者数:72名)

第120走 “ミュージアム・リレー”が神奈川県立

生命の星・地球博物館の講義室及び特別展示室で開催されました。

まず初めに、十周年、第120走(回)目を記念して、斎藤靖二館長から星槎学園湘南校(神奈川県二宮町)の参加されている生徒に「地球博物館オリジナルノート」が手渡され(写真)、星槎学園湘南校からはお祝いの生花が贈呈されました。



生徒代表に記念品を手渡す斎藤館長

次に、開催中の特別展「ナウマンゾウがいた! ~温暖期の神奈川~」について、担当の学芸員より特別展を開催する経緯が、調査・研究から資料の収集・整理保管、展示、教育・普及(学習支援)活動へという博物館機能に基づいて紹介され、続いて特別展を見学しました。

そして、第121走(2007.10)の“ミュージアム・リレー”が予定されている箱根町立箱根湿生花園と彫刻の森美術館(2館で開催)へと引き継がれました。現在、第126走(2008.3)まで企画されています。

ちなみに、第120走までの延べ参加者数は、星槎学園湘南校の生徒さんが4,290名、一般の方が3,790名、ミュージアム関係者が2,330名で、合計10,410名です。



担当の奥野さん

○ 2007年9月8日(土) 13:00~16:30

「10周年記念講演会」 (参加者数:150名)

「ミュージアム・リレー」10周年記念講演会は、神奈川県立生命の星・地球博物館のシアターで行われ、最初に、関係者の挨拶がありました(4ページから掲載)。

続いて、「ミュージアムの魅力~ミュージアムをより楽しむために~」をテーマとして、「ミュージアムにおけるエンジョイメント」と題し、文部科学省生涯学習政策局社会教育課の栗原祐司地域学習推進室長、「学ばないこと・学ぶこと 博物館の魅力」と題し、東京大学大学院教育学研究科・教育学部の鈴木眞理准教授、「富士・箱根・伊豆の魅力とミュージアム」と題し、神奈川県立生命の星・地球博物館の斎藤靖二館長の講演が行われました(8ページから掲載)。

○ 2007年9月8日(土) 17:30~19:30

「懇親夕食会」 (参加者数:63名)

10周年を記念した「懇親夕食会」は、箱根湯本富士屋ホテルで開催されました。JMMAとWESKAMSの会員及び博物館関係者のほか、小澤良明小田原市長や山口昇土箱根町長のご臨席を賜り、祝辞も頂戴しました。さらに、伊吹文明文部科学大臣・衆議院議員や亀井善太郎衆議院議員、原義明西さがみ連邦共和国観光交流推進協議会会長・小田原商工会議所会頭からの祝電も披露されました。どの祝辞にも、今後とも、地域ミュージアムが連携し、生涯学習や地域文化の発展に寄与して欲しい、との期待が込められていました。

なお、乾杯のご発声はWESKAMSの旗をデザインされた江戸民具街道の秋澤達雄館長が、閉会の挨拶は本間寄木美術館の本間昇館長が行いました。

○ 2007年9月9日(日) 9:00~13:00

「10周年記念関連行事」 (参加者数:25名)

翌日は「ミュージアム・リレー」10周年記念関連行事」として、以下の行事が開催されました。

まず、宿泊先の湯本富士屋ホテルに近い「早雲寺」の史跡見学会が行われ、早雲寺の千代田紹禎住職と菅井清登実行委員長の解説・案内により、本堂の襖絵をはじめ枯山水の庭、境内の石碑、石塔など、貴重な文化財を拝観しました(18ページから掲載)。

次に、早雲寺から徒歩5分ほどの「箱根町立郷土資料館」に移動し、大和田公一館長から館の概要説明と三つの道をテーマとした常設展示室及び企画展

「箱根彩景」の解説がありました(20ページに掲載)。

その後、同資料館の学習室にて、「ミュージアムからみた観光客誘致と歴史遺産」と題し、JMMA常任理事及び事務局長の高橋信裕実践部門部会長の特別講演が行われました。神奈川県西部地域には、自然遺産とともに歴史的遺産が多くあり、ミュージアムと結びつけて観光客誘致をはかる必要があるとの提案がありました。その一例として、学生の研究発表が紹介されました(21ページから掲載)。

そして、「箱根町への観光振興提案」と題し、慶応大学湘南藤沢キャンパスの上山信一ゼミの学生さんから事例が提案されました。

学生さんの新鮮な提案に参加者の意見や情報が交換され、予定時間を過ぎて終了しました。

24ページから掲載されている参加者の感想のとおり、2日間にわたる行事は、皆様のお陰で、充実した内容となりました。ここに記して、感謝の意を表します。

併せて、僅かな時間の中で、講演要旨や感想等を寄稿いただきました皆様、この記念行事にご尽力くださった実行委員会の皆様、掲載されています大部分の写真を撮影、提供くださいました箱根写真美術館さま及びこの報告の原稿のとりまとめにもかかわられました菅井実行委員長と小田原市郷土文化館の大島慎一担当主査にも心から感謝申し上げます。

今回の記念行事は、「神奈川県西部地域ミュージアムズ連絡会会則」第1条の「21世紀の本格的な生涯学習時代に相応しい開かれたミュージアムのあり方を、神奈川県西部地域のミュージアムが交流・情報交換等を通じて探究し、相互の施設の発展と振興、学術文化の進展に寄与するとともに、より一層の親交を深めることを目的とする」をふまえ、さらにそれを超えて展開されました。

今後とも「神奈川県西部地域ミュージアムズ連絡会」および「ミュージアム・リレー」を中心とした様々な活動に、なお一層のご支援とご協力をお願い申し上げます。

“ミュージアム・リレー” 10周年記念講演会開会挨拶

WESKAMS協力者
実行委員長 菅井 清登

皆さん 今日は。実行委員長の菅井です。

神奈川県西部地域ミュージアムズ連絡会の10周年記念講演会に、こんなに大勢の皆さんにお集まりいただき、開催できますことを大変うれしく、心より感謝申し上げます。

さて、神奈川県西部地域ミュージアムズ連絡会について、少し説明させていただきます。連絡会は、WEST KANAGAWA MUSEUMS 通称ウエスカムズと呼んでいます。

会長を置かない、会費もない、ゆるやかなつながりを持つ連絡会で、会員は、小田原・箱根を中心とした博物館、美術館、植物園など、様々なジャンルのミュージアム50館で構成されています。

このウエスカムズの活動の目玉が“ミュージアム・リレー”です。毎月1回、加盟館園持ち回りで実施する巡回イベントで、展示解説や見学、体験学習など多彩です。

記念すべき第1回は、1997年10月神奈川県立生命の星・地球博物館で開催され、以来、一回も欠けることなく続けてきました。2006年1月には、箱根ガラスの森でめでたく100回を達成することが出来、盛大に「ミュージアム・リレー」第100走達成記念行事を開催させていただきました。

そして、本日の神奈川県立生命の星・地球博物館で、10周年、120走を迎えることが出来ました。

ここまで続けてこられましたのも、リレー参加の一般の皆さんの温かいご支援、第1回目から参加をいただいている星槎学園湘南校さんの熱意、そして加盟各館園やミュージアム関係者、事務局としてこ

のを支えてくださっている神奈川県立生命の星・地球博物館、皆様のご支援があってこそこの10年であると、実行委員会として心より敬意を表します。

今回の10周年記念事業の執行に当たりましては、「ミュージアムの魅力～ミュージアムをより楽しむために～」を、テーマとした講演会を開催するわけですが、共催いただきました日本ミュージアム・マネジメント学会関東支部並びに実践部門、神奈川県立生命の星・地球博物館、後援いただきました神奈川県博物館協会と生命の星・地球博物館友の会さんには、まずもって、お礼申し上げます。

本日の講演につきましては、「ミュージアムにおけるエンジョイメント」と題して文部科学省の栗原祐司先生に、「学ばないこと・学ぶこと 博物館の魅力」と題して東京大学の鈴木眞理先生に、「富士箱根伊豆の魅力について」と題して地球博物館の斉藤靖二館長に、お話いただくことになっております。

お三方とも、「博物館を楽しむ達人」、「話題豊富」とお聞きしておりますので、あっという間の3時間、ミュージアムの魅力を堪能できるのではないかと、私も楽しみにしているところです。

“ミュージアム・リレー”10周年記念事業としての講演会は、実行委員会として、精一杯知恵を絞って企画しました。内容の濃い講演会が計画されたと、確信しています。

“ミュージアム・リレー”はまだまだ続きます。もうすでに、10月の第121走、箱根町立箱根湿生花園と彫刻の森美術館にバトンタッチされており、更なるネットワーク活動の充実に向け、加盟館園それぞれの努力が続けられていくことを確信しています。

本日まで参加の皆様には、今後とも、“ミュージアム・リレー”への一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

ありがとうございました。



挨拶する菅井実行委員長



挨拶する倉本支部長

開会挨拶

JMMA関東支部
支部長 倉本 昌昭

皆様、こんにちは。昨日は台風7号がこの小田原に上陸ということで、本日の開催を心配しておりましたが、台風一過の晴天に恵まれ、嬉しく思っております。

“ミュージアム・リレー”が、第120走(回)、10周年ということで、驚くべき継続で感動しております。こうしたことは長く続けることが非常に大事で、それには大変な努力と多くの方の協力がないと駄目で、一度の中断もなく続けられてこられましたことは本当に素晴らしいことです。

私どもの学会も第50走及び第100走達成記念事業に共催した他に、過去には「早春の箱根にて、美術館のCS戦略を学ぶ」と題した部会の研修会も開催させていただきました。

また、この神奈川県西部地域ミュージアムズ連絡会の事務局を担当している奥野花代子さんの論文『地域博物館ネットワーク運用の一形態～ミュージアム・リレーの2年間より～』に第1回学会賞を授与(2000年3月)しました。

今回の“ミュージアム・リレー”10周年記念事業につきましても、学会の会則第3条の「ミュージアム・マネジメントに関する研究及び情報交換を通じて、国内外のミュージアムの発展を図る」という目的に沿うもので、学会の活動としても連携を深める良い機会となっており、共催できましたことを喜んでおります。

最近のミュージアムの活動も多様で、現在、博物館法の改正を含めて新しい博物館制度のあり方が検討されています。一般の方々へのミュージアムへ寄せる期待も大きいです。

こうした“ミュージアム・リレー”がますます続けられますよう祈念し、皆様方にもご支援をお願いし、簡単ですが、日本ミュージアム・マネジメント学会関東支部としてのご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

挨拶

JMMA顧問
WESKAMS 特別顧問
濱田 隆士

神奈川県西部地域ミュージアムズ連絡会は、神奈川県立生命の星・地球博物館の開館の翌年1996年7月、この指生まれ方式で集まってくれた西部地域の博物館園の皆さんによってできました。



翌年の1997年10月から連携・協調事業として、“ミュージアム・リレー”と名付けた活動が実施されまして、私がこの地球博物館を辞めた後も、青木淳一前館長、斎藤靖二館長が引き継いでくださいました。“ミュージアム・リレー”を続けてくださいましたことに深く感謝しております。

とくに星槎学園湘南校の生徒さんが毎回参加してくれることが大きな力となっていると思います。

第1回目のスタート会場がこの神奈川県立生命の星・地球博物館で、本日、午前中の第120走目もこちらでの開催で、満10周年を迎えることができました。非常に喜ばしいことです。

これまでも“ミュージアム・リレー”第50走及び第100走達成記念行事が「ミュージアム・エデュテインメント」(博物館楽修)を基本テーマに開催されてきましたが、この言葉は「エデュケーション」と「エンターテインメント」をあわせて、かつて、私がつくった造語で、“ミュージアム・リレー”は、まさに「ミュージアム・エデュテインメント」です。

立地条件を活かし、ゆるやかなつながりを基本として、様々な種類のミュージアムがその特色をだしながら自発的に実施している“ミュージアム・リレー”は、「移動型の生きている大きな博物館」です。全国的にも大変珍しく、注目されているネットワーク活動の一つとなっております。

これからも皆様のご支援とご協力をお願い申しあげ、簡単ではございますが、挨拶といたします。

挨拶

星槎学園高等部湘南校
校長代行 **結城 卓彦**

ご紹介にあずかりました星槎学園高等部湘南校の校長代行の結城と申します。“ミュージアム・リレー”がめでたく120回を数え10周年を迎えられたことのお喜びとお祝いを申し上げます。

本校は、リレースタートの年に開校し、体験学習を重視するという方針に合致したこともあり、第1回から参加させて頂く幸運に恵まれ、ほぼ毎回参加させて頂いたこととなります。この間、連絡会加盟の皆様には、格別のご配慮を頂くと共に、優れた美術品・工芸品、そして貴重な歴史資料を分かりやすく、懇切丁寧な解説付きでご提示頂き、またとない出会いの空間を演出して頂きました。辛抱の効かない最近の高校生ですので、さぞやご迷惑をおかけしたことと思いますが、加盟各施設の寛容な対応にこの場を借りて感謝とお礼を申し上げます。

さて、星槎学園高等部湘南校ですが、不登校経験者を始め、LD等様々な生徒層を抱えてインクルージョン教育を目指している学校です。これまで、常に生徒を中心に置き、生徒に寄り添った「心温かい教育」という特色を大切にしながら、二宮の里に10年の足跡を刻んで参りました。また、学校の創設者である宮澤会長が掲げた教育理念に「人を認める」「排除しない」、そして、「仲間を作る」という大切な三つの言葉がありますが、それを着実に定着してきた10年でもあると思っています。地域の皆さんの暖かいまなざしは勿論ですが、地道な教育活動の中で、湘南校という学校の存在が長い時間の中で理解されてきているところだと思っています。

ところで、このような本校の生徒達は“ミュージアム・リレー”をどのように受け取ってきたのでしょうか。確かに始めの頃は、学校から与えられた体験授業の一環ということで、義務として付き従ってきたものもありましたが、卒業生の次のコメントにみられるように、様々な捉え返しをしております。

- A 人に対する思いやりの気持ちを学んだ。
- B 積極的に家事の手伝いをするようになった。
- C 本当に素晴らしいものには人を惹きつける術がある。

D 様々な体験にチャレンジするのもリレーの魅力の一つ。

E 今まで見たものは、今の私の作り出すものだけではなく、私自身を支えている。伊藤若冲、彼の作品と向き合ったとき思わず息を呑んだ。

F 自分から行動し、集中してものごとを学ぶことにより自分を前向きにしてくれる効果がある。

G 芸術はよく分かりませんが、避けて通るのはもったいない。

H 作品の感想を言ったり、友人としゃべりながら楽しく作品を鑑賞したい。

I 暇なときに行ってみようかなと思うようになった。

J 高校の3年間の思い出が、より明るく、にぎやかで内容の濃いものへとようになっていくだろう。

このように、展示物の見学をはじめ、講話や体験学習、意見交換などの交流の場面を通して、コミュニケーションの糸口を見つけるだけでなく、3年間の高校生活に何らかのインパクトを与える契機として受け止めているようです。

以上、教育活動の一環としての“ミュージアム・リレー”の成果は計り知れないものがございしますが、連絡会の皆様には様々な場面で大変お世話になって参りました。湘南校のゼミや同好会に講師を派遣していただき、学習支援にもご協力いただきましたのもその一つです。

今後は、日常の教科指導や特別活動等、学校行事全体の中でどう位置づけていくのか、教育活動における様々な課題を整理しながら“ミュージアム・リレー”に関わらせていただければと思っています。

最後になりましたが、お忙しい中ご列席いただきましたご来賓の皆様、ありがとうございます。今後とも連絡会加盟の皆様を始め、地域の皆様に育まれながら、よりよい学校作りに邁進して参りますのでよろしくお願い申し上げます。

以上、簡単ですが、お礼とお祝いの言葉とさせていただきます。本日はおめでとございます。ありがとうございました。

星槎学園高等部湘南校
在校生代表

3年 ^{まつひら}松日楽 美幸

“ミュージアム・リレー”が120回を数え、また10周年を迎えられたことをお祝い申し上げます。この“ミュージアム・リレー”には、私の先輩にあたる1期生から、現在1学年の11期生まで参加させて頂いています。第1回からほぼ毎回参加させて頂き、本当に感謝しております。

現在3年の私は、入学してからほぼ毎回参加させて頂いています。毎回何かを見たり、作ったり、いろいろなことが経験できたと思います。これをきっかけに美術館などに興味を抱くようにもなりました。以前の私は、体を動かすことにしか興味がなく、何かをジーっと見ることはどちらかという嫌いでした。ですから、正直なところ入学当時は“ミュージアム・リレー”に参加することに、喜びを感じるなどありませんでした。でも、参加し続けているうちに「何かを作るのって楽しい！面白い！」「何かを見るのって凄い！見ているだけなのに癒される！」などを感じるようになったのです。それからは毎回参加するのが楽しみになりました。

星槎学園高等部湘南校では、他の学校にはない授業や行事がたくさん行われています。どれも、皆に興味や希望を与えるものばかりです。例えば、No.1ゼミという授業が週1で行われています。それぞれに好きなことができる授業です。この時間に先生に調理を教えてもらっていた生徒もいます。その生徒は調理師になりたいと思い、調理の専門学校に進学をしました。湘南校は、このように自分が何をやりたいのか見つけられるチャンスが豊富な学校だと私は思っています。“ミュージアム・リレー”は湘南校にとってかせない行事のひとつだと思っています。なぜなら、これも皆に希望や何らかの目標を与えると思うからです。きっと“ミュージアム・リレー”に参加して、自分のやりたいことを見つけた人も居ると思います。これからも皆に希望や目標を与える存在のひとつであってほしいです。

残りわずかな高校生活。私たち3年は、“ミュージアム・リレー”に参加することはもうないかもしれませんが、3年だけでなく生徒は他にもたくさんいます。私が卒業する来年には新入生も入ってきます。これからも私の母校となる星槎学園高等部湘南校を何卒よろしく願っています。



結城校長代行と松日楽さん

私からは以上になります。最後に、神奈川県西部地域ミュージアムズ連絡会のみな様、本当におめでとうございます。ありがとうございました。

お二人のご挨拶の後、結城卓彦先生から濱田隆士特別顧問に、生徒さんを代表して松日楽美幸さんから神奈川県西部地域ミュージアムズ連絡会加盟館園に感謝状が送られ、代表して神奈川県立生命の星・地球博物館の齋藤靖二館長が受け取りました。



感謝状の贈呈風景

〈記念講演〉

ミュージアムにおけるエンジョイメント

JMMA会員

文部科学省生涯学習政策局社会教育課
地域学習活動推進室長 栗原 祐司

本日は、“ミュージアム・リレー” 10周年並びに120走、誠にありがとうございます。ただ今ご紹介にあずかりました栗原と申します。私の肩書きは、御覧のように漢字ばかり27文字も並んでいる大変長いもので、これから行政説明を始めます、なんてことになると、いきなり皆さん舟を漕ぎ始めることになるのではないかと思います。今日は肩書きを外させていただき、少し楽しい話をしたいと思います。このポストは博物館行政を担当するところで、7月1日に就任したばかりなのですが、実は私が文部省に入省以来ねらっていたポストなのです。ちょうど今、博物館法改正に向けた検討が進んでおり、何もこの忙しい時に就任しなくても、とも思うのですが、やはり博物館学をちょっとかじった者であれば日本の博物館法は問題が多いと考えない人はいないと思うので、その絶好のチャンスを与えられたことに感謝して、日本の博物館行政の充実のために取り組みたいと思っています。と、一応決意表明をしましたが、今日はそんな話はしません。

先ほど星槎学園のお話がございましたが、思い起こせば私が博物館めぐりを始めるようになったのも中学生の頃であったかと思います。夏休みに博物館を5館だか10館訪問せよ、という宿題が出されて、「ぴあ」か何かを参考にしながら博物館を訪問し、以来病みつきになってしまったわけです。多ければいいというわけでもないのですが、現在国内約4,100館、アメリカ約1,600館、その他諸外国あわせて500館くらいを訪問しており、“ミュージアム・フリーク”を自称しています。まあ、俗にいう“博物館おたく”ですね。中学生の頃から、“ミュージアム・リレー”という素晴らしい機会を与えられている皆さんの中から、将来さらなる“ミュージアム・フリーク”が生まれることを期待したいと思っています。“ミュージアム・リレー”がここまで続いているのも、濱田先生というよき先導者と、奥野先生というよき実践者がおったればこそと思います。深く敬意を表したいと思います。

新しいミュージアムのトレンド

さて、言い古されたことではありますが、以前は



講演する栗原さん

「博物館行き」という言葉があったように、博物館というのはなんとなくカビ臭いところ、使われなくなったものをしまっておく場所、あるいはどこかお高くとまったところ、お勉強する場所、というイメージがあったのですが—今でも依然としてそういう博物館があるのは事実ですが—、最近はずいぶんと雰囲気が変わってきて、多種多様な博物館や美術館が作られ、利用されるようになったと思います。動物園でも同じで、以前は、人は一生のうちに三回動物園に行く、つまり子どもの時と、親になって子どもを連れて、そしておじいさんになって孫を連れて、なんて揶揄されたものですが、最近では結構カップルが訪れるデート・スポットになっていたり、旭山動物園のように全国から観光客が訪れる園館も出始めています。その象徴的な例が、雑誌の特集に見ることができます。以前は、「芸術新潮」や「ぴあ」などの情報誌くらいでしかミュージアムの特集を組まなかったのが、最近は「OZ magazine」や「BRUTUS」、「Casa」、「男の隠れ家」、「日経おとなのOFF」など、老若男女を対象にした様々な雑誌が特集を組むようになりました。「散歩の達人」（2005年8月号）に至っては、付箋だらけであるのを見てもわかるように、私が行ったことのないかなりマニアックなミュージアムまで紹介しており、実にジェラシーを感じさせてくれる一冊でした。読む人がいなければ特集なんて組みませんから、今はそれだけ様々な方がミュージアムに関心をもっている、ということです。逆に言えば、それだけ多くの人がミュージアムに関する

情報に接する機会が増えているとも言え、まさに時代は大きく変わりつつあると思います。ただし、こうした新しいミュージ



アムのトレンドの変化に博物館人、つまり当事者が十分に対応できているかと言うと、必ずしもそうではないというのが、現在の日本の博物館が抱えている大きな問題なのではないでしょうか。

「エンジョイ！」

私はアメリカのミュージアムも数多く見学してきましたが、日本との最大の違いは、アメリカのミュージアムは、地域住民が自分たちが作り上げた自分たちのミュージアムだ、という気概と誇りを持っているということです。これは国家の成り立ちの違いにもよるものですが、地域住民に対するサービスという点でも彼我の差はあまりに大きいと感じました。もう一つは、あるシンポジウムで申し上げたことがあるのですが、アメリカの特に動物園や水族館では入口で「エンジョイ！」と言われることが多かったことにショックを受けました。要は「楽しんでね！」ということなのですが、日本の博物館・美術館はもちろん、動物園や水族館でそんなことを言われたことは一度もありません。せいぜい「ごゆっくりどうぞ」くらいでしょうか。

この「エンジョイ」、実は国際博物館会議 (ICOM) 規約でもはっきりと謳っており、博物館を「社会とその発展に貢献するため、人間とその環境に関する物的資料を研究、教育及び楽しみの目的のために、取得、保存、伝達、展示する公開の非営利的常設機関」と定義しています。日本の博物館法では「レクリエーション等に資する」という言葉があって、少々違う意味で捉えられている面もあると思うのですが、これまで来館者サービスというものがあまり重要視されてこなかったように思います。これは、ミュージアムのマネジメントにもつながる話であり、来館者がミュージアムを後にした時に、「ああ、楽しかった」と思うか、「ああ、疲れた」とつぶやくかは大きな違いだと思います。私も思いがけない資料が展示してあったりすると、思わずじっくり見てしまい、帰る頃にはくたくたになっていることがあるのですが、それは非常に心地よい疲れで、「ああ、来てよかった」とか「また来ようかな」などと思うものです。この「また来ようかな」と思わせることが、ミュージアムのマネジメントのミソです。どんなにすばらしいコレクションがあっても、どんなに優れた研究成果があがったとしても、それはミュージアムの機能の一部しかないわけで、すばらしいコレクションとすばらしい研究成果を、来館者が満足いくようにわかりやすく提供し、知的好奇心を満足させる。



これこそが究極の「エンジョイ」ではないかと思えます。これは福岡のマリンワールド海の中道の企画展「美肌コレクション」のチラシですが、なんだかエステサロンか何かの広告のようですね。実際はこれも海洋動物の肌の研究成果なのですが、こういうチラシにすると、何か面白そうで、見に行ってみようかな、という気にさせられます。ミュージアムはこういう工夫も必要なのだと思います。

ミュージアム・レストランとショップ

さて、時間がないので、話を少し飛躍させます。来館者がエンジョイすることができ、居心地のいいミュージアムであるためには、鑑賞環境だけでなく様々な付帯施設が整備されていることが求められます。その一つがレストランで、最近ではミュージアムのレストランを紹介する本まで出ています。また、特別展に合わせたメニューを用意するミュージアムも増えてきました。この近くの「箱根ラリック美術館」では、ルネ・ラリックが装飾を施したオリエント急行の車内でコーヒーとデザートを楽しむことができますが、こうしたそこでしか楽しむことのできないミュージアムと一体となった、あるいは作品鑑賞の余韻を楽しみながらゆっくりできる空間が必要とされているのです。

ミュージアム・ショップも同じです。ミュージアム・グッズは、ミュージアムの感動体験を家に持って帰りたいという欲求をかなえてくれるものであり、その発想はご利益を持ち帰りたいというお寺や神社のお守りに通じるものがあります。それも、どこにでも売っているものではなく、そこでしか売っていないオリジナルであれば、なお一層ありがたみが増

大します。ミュージアム・グッズに関しても、最近はいろいろな本が出されており、世界中のミュージアムのグッズを見ることができますが、へたな土産品よりはこうしたミュージアム・グッズを買って帰った方がよっぽど喜ばれるのではないかと思います。

私は、ミュージアムを訪問した際に必ずミュージアム・ショップをチェックすることにしており、目新しいグッズを見かけた場合は買うようにしていたら、塵も積もればということ、かなりのミュージアム・グッズ・コレクションを形成してしまいました。今日はそのうちのいくつかをダンボール箱3箱に詰めて持ってきましたので、ご紹介したいと思います。なお、グッズをそのまま大事に保存できればいいのですが、残念ながらそこまで金持ちではないので、いずれも日頃から身につけ、大いに活用しています。そのため、だいぶよれよれになってしまっているものもありますが、その点はご了承ください。

身の回りのミュージアム・グッズ

例えば、このネクタイは、ロンドンの大英博物館のロゼッタ・ストーンをモチーフしたのですが、これ以外にもたくさんあります。これはメトロポリタン美術館です。これは台湾の国立故宮博物院、韓国の国立中央博物館、フロリダのサルバドル・ダリ美術館、ロサンゼルス・カウンティ美術館、国立科学博物館、東京国立博物館、埼玉のジョン・レノンミュージアム等々…。ネクタイピンもミュージアム・グッズにしたいところですが、今日は日本野鳥の会オリジナルのヤマセミのネクタイピンにしてみました。



このワイシャツは、ニューヨークにあるフランクリン・ルーズベルト大統領図書館&博物館のグッズです。ワイシャツのミュージアム・グッズの例はそれほど多くないのですが、ポロシャツやTシャツなら山ほどあります。アメリカの国立動物園、シカゴのフィールド自然史博物館、フロリダ水族館、バレーボールの殿堂博物館、ホッケーの殿堂博物館等々…。

この大阪市立自然史博物館のTシャツは秀逸で、虫偏の漢字が並んでいます。さすがにこれは着る気にならなかったの、ビニール袋に入れたままにな

っています。アロハシャツもあります。これはハワイのビショップ・ミュージアムのオリジナルで、図柄にミュージアムの建物が描かれています。



それから、今日の時計は、スミソニアングッズで、1996年に創立150周年を記念して作られたプレミアムものです。美術館ではアートな時計も結構売られているのですが、高い割にはあまり実用的ではないので、ほとんど持っていません。靴下は香川県・直島の地中美術館のものがありますが、見えにくいのか大人用に売られている例はあまり多くないと思います。下着も同じですね。本当は、こういうテーマでお話するときは、頭のてっぺんからつま先までミュージアム・グッズで固めたかったのですが、なかなか難しいようです。

さて、いろいろしゃべっていたら、暑くなってきたのでハンカチを取り出します。もちろん、これもミュージアム・グッズです。これはこの近くの星の王子さまミュージアムのものです。ロンドンのヴィクトリア&アルバート美術館のウィリアム・モリスデザインのハンカチは私のお気に入りです。この他にも、ポーラ美術館、マリー・ローランサン美術館、池田満寿夫美術館、岡本太郎記念館、九州国立博物館、明治大学博物館、横浜美術館、江戸東京博物館、名古屋港水族館等々いろいろあります。深川江戸資料館のハンカチは凝っていて、江戸時代の古地図に、資料館の場所を明示しています。



ハンカチでは汗が十分ぬぐえないので、タオルを取り出しますと、これもまたたくさんあります。東京藝術大学美術館、日本サッカーミュージアム、葉祥明美術館、石ノ森章太郎ふるさと記念館、日本新聞博物館、到津の森公園…。バスタオルもあります





が、これは矢口高雄さんの「釣りキチ三平」が描かれています。矢口さんのふるさと、秋田県横手市にある「増田まんが美術館」で買ったものです。

最近、手拭の売上げがいいそうです。長谷川町子美術館のサザエさん手拭はなかなか味があると思いませんか。このほか、北九州市にある松本清張記念館、越前ガニミュージアム、東京都写真美術館、記念館三笠、最近オープンした横須賀美術館でもいいデザインの手拭を出しています。

メガネを拭こうと思ったら、このメガネケースはモネの睡蓮をモチーフにしたものです。メガネ・クリーナーは、大和銀行貨幣資料館のもので、目黒寄生虫館のようなストラップ・タイプのものもあります。残念ながらメガネそのものはミュージアム・グッズではありません。

携帯を拭こうと思ったら、ロダンの「考える人」をモチーフにした携帯クリーナーを使います。国立西洋美術館のオリジナル・グッズです。ストラップも、今は森美術館のものをつけていますが、国立西洋美術館の「考える人」、東京藝術大学美術館の高橋由一の「鮭」、千葉市動物公園のレッサーパンダ風太くんなど、コレクションをモチーフにしたストラップが数多く出されています。私はタバコは吸わないのですが、ライターもあります。これは仮面ライター！というわけで、石巻の石ノ森萬画館で買ったものです。

ミュージアムを訪問するときには、メモの用意は欠かせません。まだまだ紫外線がきついので外出する際には帽子も必要でしょう。この帽子は、フロリダのエジソンとフォードの別荘のもので、中原中也記念館では、中也のトレードマークである帽子を売っています。そういえばアメリカでジョージ・ワシントンの帽子を買いましたが、学芸会くらいでしか使い道がないので置いてきてしまいました。

いろいろものを入れるのには、トート・バッグが便利です。これは私のお気に入りのボストン美術館のトート・バッグですが、アメリカのいくつかのミ

ュージアムで「いいバッグね」と話しかけられました。これはワシントンD. C. のフィリップ・コレクションのもので、「America's First Museum of Modern Art」と書いてあり、アーティストの名前が並んでいます。これは大原美術館で、こちらは国立台湾博物館。国立西洋美術館のこれはレアものです。何の変哲もない黒いトート・バッグですが、ロゴのスペルが「National」ではなく、スペルミスで「Natalin」となっているのです。気をつけたいものですね。

メモ帳は大阪市立自然史博物館友の会のフィールドノートと福島県文化財センター白河館まほろんのを愛用しています。シャープペンは国立西洋美術館と名古屋ボストン美術館、ボールペンはウィーンのレオポルド美術館、ミルウォーキー動物園等々、家には何本もあります。使う気になりませんが、MoMAの消しゴムもあります。東京都写真美術館のポストイットもしゃれています。丸い箱に入った国立国際美術館のポストイットもなかなかいいです。資料を入れるのにクリアファイルも必要ですが、これも気がつけば数十枚集まってしまいました。定規を使うのなら、岸田劉生の麗子像を描いた大原美術館のオリジナル定規は、麗子の扇子が動きます。これは大英博物館、これは台湾の故宫博物院、これはロンドンのチルドレンズ・ミュージアム、ユーレイカ！の定規です。

メモをとったら、データを記録しなければなりません。その時は金沢21世紀美術館オリジナルのUSBに保存しましょう。美術館を上から眺めた円形のデザインが描いてあります。おそらく蓑前館長のアイディアなんでしょうけど、これをショップで見たと、「ここまでやるか」と思いました。もちろん、マウスパットもミュージアム・グッズです。香りを楽しみたいなら、ガーデン・ミュージアム比叡のオリジナル・ルームフレグランスをシュッシュと。

食べられるミュージアム・グッズ

旅行をしたら、ご近所の方におみやげを配るために、饅頭を買わなくてはなりません。そういうわけで、最近オリジナルのデザインを施した食品を置くミュージアムも増えてきました。長崎歴史文化博物館には、オリジナル・デザインのカステラが置いてあります。トヨタ博物館は、なぜかオリジナル・ビーフカレーを売っています。博物館と言っているかどうか微妙ですが、横濱カレーミュージアムでもオリジナルのカレーを売っていました。大原美術館では、所蔵作品をモチーフにした「タヒチのカレー」

と「バニュー村のハッシュドビーフ」を売っていましたが、先日訪問したら、カレーの方は売り切れており、既に生産中止になってしまったそうです。

これは長崎県美術館のゴフルです。閉館してしまつた松江のルイス・C・ティファニー庭園美術館のゴフルもあります。三鷹の森ジブリ美術館のクッキー、市原ぞうの国のチョコクランチバー、沖縄美ら海水族館のチョコクッキー、スミソニアンのみント…。いずれも中身は食べてしまいました。

アメも定番で、これは九州国立博物館のサクマドロップスです。鳥根県立古代出雲博物館は、オリジナル・フィギュアのおまけつきです。なかなか商売がうまいですね。鳥根県立美術館は、宍道湖の夕焼けをデザインしたアメを売っていますが、時間が経つにつれてデザインが崩れていくのが残念ですね。名古屋市美術館でもモディリアーニの女性を描いた飴を売っていますが、ほおっておいたらだんだん目がたれてきて、モディリアーニの面影がなくなってしまうました。

これはブリジストン美術館のコーヒーです。このお茶は、あいだみつを美術館と地中美術館。この紅茶は、イギリスのキューガーデン。お酒だってあります。これは京都の月桂冠酒造が運営している大倉記念館のオリジナル酒ボトル。これは岐阜の博石館オリジナル・ビールです。これは厳密にはミュージアム・グッズではありませんが、境港の水木しげる記念館で売っていた妖怪コーヒー。「ねずみ男汁」など6種類あります。まあ、オリジナルといっても要はラベルだけなんです、なんとなくうれいですよね。これらを飲むときは、もちろんミュージアム・グッズのコップやグラスを使います。コースターもミュージアム・グッズです。スプーンもそうです。

ついでに言えば、最近ミュージアム・レストランとして一流のレストランの支店が設置される例が多いのですが、私に言わせれば、それは“ミュージアムにあるレストラン”というだけで、“ミュージアムのレストラン”とはいえません。やはり、コレクションや特別展等に合わせたメニューや、そのミュージアムにふさわしい装飾等が必要です。ミュージアム・フリークとしては、ぜひミュージアムのロゴ入りのものがほしいのです。

例えば、これは先ほどこの生命の星・地球博物館のレストランでお昼をいただいた際に入手したのですが、箸入れ袋にしっかり名前がはいっています。これです。これが大事なのです。多摩動物園や国立民族学博物館などでも入っていました。それから、

これはシュガーですが、メトロポリタン美術館、これは故宮博物院、これは箱根ラリック美術館、いずれもロゴマークが入っています。紙ナプキンもあります。これはデンバー動物園、国立故宮博物院、ケネディ・スペース・センター、フロリダのディズニー・ワールド



のもので。これはとっとり花回廊のおしぼりです。これは大原美術館の隣の喫茶エルグレコのストロー袋。そういう意味では、ここ箱根にあるポーラ美術館のレストランは、素晴らしいですね。ランチマット、紙ナプキン、シュガー、おしぼり、箸入れ袋のすべてにロゴマークが入っています。一回利用しただけで、一気に5つもコレクションが増えてしまいました。まあ、ちょっとこの話はディープに入りすぎました。

石鹸もあります。これはサイパン熱帯植物園のココナッツ・オイル・ソープで、実際に植物園で栽培しているヤシの実から作った石鹸だそうです。日本語で書いてあるところがにくいですね。石岡と袖ヶ浦にあるダチョウ王国のオーストリット・ソープは、ダチョウの油の石鹸です。

まだまだあります。これは長崎県美術館のオリジナルCDです。実際に会場でBGMとして流れていて、その音楽を自宅で聞いたら名画を思い出す、なんてのはいいですね。これは、山梨県立科学館のプラネタリウムで投影しているオリジナル番組のサウンドトラックのCDです。これらのCDを持ち歩く際は、星の王子さまミュージアムのCDケースとか、韓国の国立扶餘博物館の軒瓦をデザインしたケースも魅力的です。

ぬいぐるみもいろいろあります。これは東京国立博物館の埴輪のぬいぐるみ。戦国時代の東洋医学書「針聞書」に出てくる虫をモチーフにした7種類のぬいぐるみは、まさに九博にしかありません。これは三内丸山遺跡のマスコット「さんまる」。この茶色いオランダ木靴を履いたミッフィー（日本では「うさ子ちゃん」の呼び名の方がなじみがあるかもしれま



せん) のぬいぐるみは、ハウステンボス限定のオリジナルです。ディック・ブルーナー氏が来日した際に許可を得て作ったものだそうです。

これはアメリカの野鳥の会のような自然保護団体であるオーデュボン協会で買った私の好きなゴールド・フィンチのぬいぐるみです。ここを押すと鳴きます。これはカーディナルで、同じく首や体をふって鳴きます。これはオオカミ保護団体に寄付してもらったオオカミのぬいぐるみで、遠吠えします。これは雲仙岳災害記念館のキャラクター・マスコット「溶岩くん」で、引っ張ると、ブルブルと振動します。

アメリカではホール・オブ・フェイム、日本語で「殿堂」博物館を少し調べたのですが、これは野球の殿堂のバット、サッカーの殿堂やフットボールの殿堂、ゴルフの殿堂のボール、バスケットボールの殿堂のぬいぐるみ等々、いろいろあります。

オリジナルのグッズをつくる

有料ですが、ミュージアムでしか撮れない写真というのがあります。まあ、プリクラのようなものですが、これがなかなかいい記念になります。葛飾柴又寅さん記念館では、寅さんと記念写真を撮りました。美空ひばり記念館や石原裕次郎記念館でも同じことをやっています。アメリカではNASAで宇宙飛行士になりました。これはフロリダのケネディ宇宙センター、これはヒューストンのジョンソン宇宙センターです。これは、ミシガン州バトルクリークの



ケロック・シリアル・シティで作った私の顔写真入りのコーンフレークです。日本でも、例えば日清食品のインスタントラーメン発明記念館で、自分でデザインを書いたカップに麺を充填してラップしてくれますが、企業系のミュージアムはこういう試みもあっていいと思いますね。

それから、時々、文化財に落書きをしたとか情けない話が報道されますが、そんなことをしないで、寄附をして堂々と名前を残せばいいと思うのです。例えば、これは実際にカリフォルニア州ロングビーチのパシフィック水族館の床に貼ってあるドネーション・プレートと同じものですが、わずか100ドル程度の寄附金で自分の好きな言葉や名前を刻むことができるのです。私はこれ以外にもアメリカのいくつかのミュージアムに名前を刻んできましたが、これは寄附金を集める上でも実にうまい方法だと思います。日本でも、例えばこれはよこはま動物園ズーラシアのアニマル・ペアレントとして寄付した際に、その動物のところにプレートが掲示されます。残念ながら一年間という期限つきです。

アメリカでは、寄附をすると、実に立派な感謝状をくれます。今日はそのいくつかを持ってきましたが、とてもデザインフルで、見ているだけで楽しくなります。誉められていやがる人間はいませんから、こういう立派なものをいただいてしまうと、また寄付しようかな、という気になってしまうわけです。ある意味、私なんか外国人でありながら、いいカモであったと思うのですが、アメリカのミュージアムに少しでも貢献したと思うと、悪い気はしません。よけいなことですが、日本では博物館に寄附をしても、極めて事務的な領収証が送られてくるだけの場合が多く、あまりインセンティブがわかりません。まあ、寄附そのものがそういう見返りを求めるものではないと、言われてしまえばそのとおりなのですが、寄附を受けた側は、やはり感謝の気持ちを精一杯あらわすに越したことはないと思うのですが、いかがでしょうか。例えば、これは某動物園のアニマル・サポーターとして寄附をして送られてきたものですが、「サポーター資金預り書兼履行引き受け書」と、実に味気ないもので、正直がっかりしました。まあ、お役所の場合仕方ないのかもしれませんが。寄附大国アメリカとの差はまだまだ大きいですね。

ミュージアム・サービスとミュージアム・グッズ

以上、いろいろ述べてきましたが、いかに私がミュージアムをエンジョイしているかわかりいただ

けたかと思えます。ただ、誤解しないでいただきたいのは、ミュージアムは決してレジャーランドやアミューズメント施設ではないということで、ただ遊んで楽しむだけだったら遊園地に行けばいいということになります。ミュージアムの楽しみは、やはり知的な興奮でなければならない。新しいことを発見し知的な好奇心を満足させてくれる喜び、今まで知らなかった、わからなかったことを知って理解する喜び、美しいものを鑑賞したり、五感を満足させてくれるような体験ができる嬉しさ、こういったものがないと、ミュージアムをエンjoyしたとは言えないと思えます。ミュージアム・グッズだって、ただ単にアイデア商品だというだけではなく、あくまでも博物館活動の延長線上として捉えなければいけないと思えます。先ほども述べたように、ミュージアム・グッズはミュージアムの感動を持ち帰ることに意義があるわけですから、どのコレクションをどのように活用し、どのようにデザインするのかというのは、まさに学芸員の仕事でもあると思うのです。日頃の研究成果を紀要等だけでなく、展示やワークショップ、ミュージアム・グッズ等に生かすことは、すばらしいサービスの提供になると思うのです。これこそミュージアム・サービスの神髄ではないでしょうか。悪しき経済効率優先主義の風潮の中で、業務の外部委託化の推進が叫ばれたりしていますが、私はミュージアム・ショップやレストランは、直営でなくとも、学芸員なり職員がグッズやメニューの企画に関わって、そのミュージアムのコンセプトにふさわしいものを作り上げていかなければいけないと思えます。逆に言えば、ミュージアム・グッズはそれだけ無限の可能性を秘めているというわけで、私のミュージアムをエンjoyする旅路は永遠に続きます。ミュージアムは、それこそ上は天文、下は地理、森羅万象ありとあらゆるものが対象となりますから、その楽しみ方は無限の広がりがあり、つきつめれば偉大な学者にも、哲学者にだってなれると思えます。ぜひ、皆さんも、多様なミュージアム体験を通じて、偉大なる哲学者になっていただきたいと思えます。

なんだか最後はとりとめのない話になりましたが、以上で私の話を終わります。ご静聴どうもありがとうございました。

*この文章及び写真は、当日の講演を基に、お忙しい中、栗原先生ご自身が執筆及び撮影してくださいました。

〈記念講演〉

学ばないこと・学ぶこと

博物館の魅力

JMMA理事

東京大学・大学院教育学研究科・教育学部
准教授 鈴木 眞理

当日、参加された同教育学部教育行政学コースの岡庭俊和さんと宮田佳織さんが以下のとおりまとめてくださいましたので、講演録とします。

鈴木眞理准教授による記念講演「学ばないこと・学ぶこと 博物館の魅力」は、次のような流れで話が進んだ。

1. はじめに
2. 「生涯学習」を考えること
3. 学歴社会と生涯学習社会
4. 博物館で学ぶということ

この講演は、記念講演会のテーマ「ミュージアムの魅力～ミュージアムをより楽しむために～」へのひとつの視座として、「生涯学習」の立場から、博物館の魅力について語られた。

はじめに、身近なエピソードを交えながら、現代社会では「わかる」ということが重視される傾向にあるが、わかったつもりになっているだけで、実際には表面的な理解ばかりになっていて、本当にわかっていることにはならないのではないかと、という話がなされ、本質的な理解の重要性を指摘した。

続いて、「生涯学習」ということばを考えるにあたり、いくつかの例をあげ、生涯学習の考え方の普及により、様々な世代の人びとが学習に参加するようになった一方で、その概念が資格・検定の取得ということに矮小化されているのではないかと指摘をした。そして、本来、生涯学習とは「生涯のいつでも、自由に学習機会を選択して学ぶこと」という考え方であり、生涯学習社会とは「生涯学習の成果が、社会において、適切に評価されるような社会」であると説明した。

その上で、博物館で学ぶということについて考えるにあたり、まず、博物館は社会教育施設であり、生涯学習社会において重要な学習機会のひとつになっていることを示した。つまり、「教育」とは教える人と教わる人が存在し、教える人には教わる人を「よく」しようという意図がある営みであることから、



講演する鈴木さん

専門的職員である学芸員がいて、見学者（来館者）を「よく」しようという意図を持って展示等の活動を行なっている博物館は、まさに教育を行っている、ということである。

さらに、博物館にやって来るのは、子どもから高齢者までのあらゆる年齢層であり、性別・職業・社会的立場もそれぞれであること、また、博物館にやって来る理由を、例えばひとことで「展示の見学」と言ったときにも、純粹に新しい知識を身につけることに意義を見出す人もいれば、家族や友人との時間を楽しむことに意義を見出す人もいる、といったように、博物館にはさまざまな学習者が存在することを示した。そして、このような利用者の多様性を考えたときにも、幅広い学習者を視野に入れて企画された展示に加えて、博物館の行う講演会や観察会、体験学習会、共同調査研究などさまざまな教育普及活動は、さまざまな学習の特性をもつ人びとの生涯にわたる学習の支援に対応しうるものであると指摘し、生涯学習社会といわれる今日の社会において、博物館のもつ魅力を示唆して講演は終わった。

以上のような講演の内容を踏まえ、私たちの感想を“ミュージアム・リレー”の活動に即して述べたい。

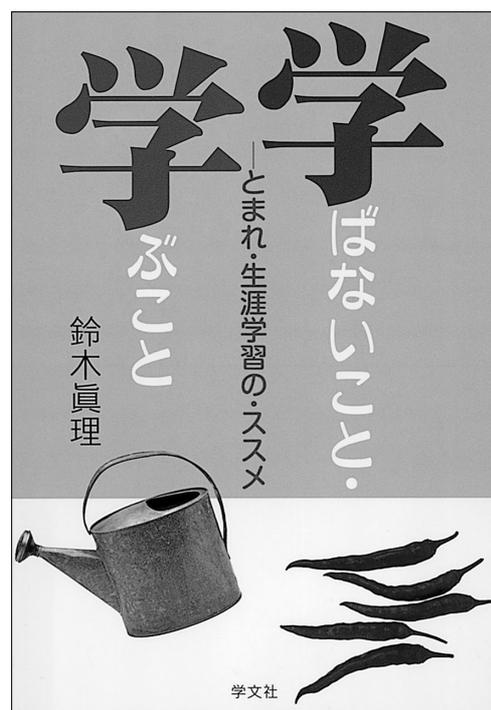
講演では、博物館をとらえる視点として、展示されている資料を見学する施設という従来のものとは異なる視点が紹介された。つまり、博物館にやって来る人びとの多様性を指摘し、その館の資料を見学するためだけではなく、講演で紹介されたようなさまざまな目的があるのであり、その目的に対応するよう、さまざまな学習活動を提供する仕組みを持っている、という視点である。

このような観点から見ると、博物館同士のまとまりである WESKAMS は、一館で活動するより、より

多様な学習機会を提供しているといえる。その実践例として、今回の講演会のタイトルでもある“ミュージアム・リレー”の継続がある。WESKAMS に参加する博物館が持ち回りで開催する“ミュージアム・リレー”では、講演会、特別展・企画展の解説、ギャラリートークばかりでなく、季節に合わせた自然観察会や寄木細工の製作などの体験活動などが実施されており、大変多様な学習機会が提供されている。これほどの学習機会はどれほど規模の大きい博物館でも一館で提供することはできない。自然・歴史・美術などさまざまな博物館の参加する WESKAMS からこそできることであり、WESKAMS は互いに連携することで、それぞれの博物館の魅力をより高められてきたといえよう。

また、“ミュージアム・リレー”が10年間途切れることなく続いてきたことは長年にわたり、来館者に学習機会を提供してきたという点で WESKAMS の活動の意義といえよう。記念講演会で挨拶された星槎学園湘南校では“ミュージアム・リレー”に第1走から継続して参加しており、10年間で延べ数千人の生徒に学習機会を提供してきたことはその実例といえる。

このような“ミュージアム・リレー”の活動が今後も継続され、より多くの人びとに、より多様な学習機会が提供されていくことが生涯学習社会における博物館の魅力をより高めていくことになるだろう。



鈴木氏の著書

〈記念講演〉

富士・箱根・伊豆の魅力とミュージアム

神奈川県立生命の星・地球博物館

館長 齋藤 靖二

神奈川県西部から静岡県にかけての地域には、いくつもの楽しい美術館・博物館・郷土資料館・植物園がある。お互いの連携を深めようと、50館が参加してミュージアム連絡会（West Kanagawa Museums：WESKAMS）がつくられ、その協調活動の一環として、館園持ち回りで「ミュージアム・リレー」を続けて10年に至っている。このように、いろいろな文化施設が集まっているのは、この地域の魅力ある自然・風土・歴史が多くの人達の心をなごませてくれるからであろう。このことは、古くから火山の景観と温泉で知られ、いまでは富士箱根伊豆国立公園として年間数千万人をこえる国内でもっとも多い利用者が訪れて楽しんでいることから理解される。

地震が頻発し火山が噴火する変動帯・日本列島は、太平洋・フィリピン海・ユーラシア・オホーツクの4つのプレートがぶつかり合っている収束境界にあたっており、さらにプレート境界が陸上にあらわれていることから世界から注目されている地帯である。なかでも、神奈川西部から静岡にかけての日本列島中央部の南部フォッサマグナと呼ばれる一帯は、本州に伊豆一小笠原弧が南方から移動してきて衝突し、本州側を大きく八の字型に屈曲させているユニークな多重衝突地帯として有名である。

この美術館や博物館などが建っている土地を、地質学的な長い眼でみると、そこには遙か遠い昔からの時間が記録されていることがわかる。南部フォッサマグナには、およそ1,500万年前に御坂山地が、約800万年前には丹沢山地が、さらに150万年前頃には伊豆地塊が衝突して付加しており、将来いつかわからないが伊豆諸島がのっている銭州海嶺が衝突してくるのであろう。このような基盤の上に、65万年前頃から箱根火山が形成され、約10万年前には富士山が誕生し、その後何度も噴火して、現在は宝永噴火300周年をむかえている。私たちが住んでいる今の地勢は、このようにして形成されてきたものである。

こうした地球科学的な背景から地震災害が心配されているが、それは私たちの生活時間というよりも、地球の営みの時間単位でみなすべきものである。中

央防災会議の資料（2004年）などから明らかなように、この地域を襲った近年の巨大地震は元禄地震と関東地震である。それらが起こった活動期の数10年以外は、200年をこえる長い静穏期が続いていて、現在もそのなかにあるといわれる。地震への備えは必要であるが、壊滅的な地震はしょっちゅうくるものではないらしい。自然災害は瞬間的な事件であって、復興しなければならないが、自然の恵みは永遠なものである。自然の恵みの大事さを教えながら、子どもたちへ、未来へ、人類の文化活動を伝えていくのが美術館・博物館の活動で、この地域はその意味でとても面白いところである。

この地をつくっている岩石のほとんどが火山岩であるが、それもまた日本の歴史をつくってきた。上杉謙信や武田信玄の攻撃を退けた後北條氏の小田原城、豊臣秀吉が小田原征伐のときに築城した総石垣の城・石垣山一夜城、これら堅固な石垣は箱根火山の溶岩でつくられた。秀吉の命で小田原城を攻め落とした徳川家康は、関東六州を与えられ、太田道灌が築城してやがて後北條氏のものであった小さな江戸城を、全国の大名を動員して大増築を行うことになったが、そのときに用いられた石材も真鶴半島や伊豆半島東海岸の石切丁場から切り出された火山岩であった。それはおそらく小田原城攻略時の経験にもとづくものであったろう。何千艘もの船で運ばれたこの地の火山岩は、その後長く続く江戸時代を支えたといえる。また、奈良時代から知られた箱根の温泉は、小田原城から江戸城へ移り変わる歴史のなかで全国的に有名になった。自然とともに、美術館・博物館の魅力未来へ長く伝えていきたいと願う。



星槎学園湘南校からの感謝状に喜ぶ齋藤館長

閉会挨拶

箱根ガラスの森
館長 岩田 正崔

ただいまご紹介いただきました箱根ガラスの森の館長の岩田でございます。

神奈川県西部地域ミュージアムズ連絡会を代表して、閉会の挨拶をさせていただきます。

いま、3人の講師の話をおうかがいし、感激しております。

栗原先生からは、男のファッションは、ミュージアム・グッズで揃えられるというヒントをいただきました。とくに、研究成果を活かして、博物館独自のグッズを販売したり、来館者が楽しめる方法を工夫することが大事である、とのご指摘やご提案をいただきました。

鈴木先生からは、博物館や美術館は、楽しく学習できる場として、楽しみながらいつのまにか、勉強している、というユーモアを交えた、お話をいただきました。このことはミュージアムの真髄でありまして、その中に心のこもったサービスが大事である、それが生涯学習ではないか、というヒントをいただきました。

斎藤館長は、大陸移動や日本列島の生き立ちを美しい映像でご紹介くださいました。また、最近、地震が心配されているが、その可能性は少なく、それよりも、子どもたちに自然の面白さを伝えることが重要であるとのご提案をいただきました。

私は二宮に住んでおりますが、昨日の台風で、二宮海岸の際を走る西湘バイパスの道路が削られ、通行できなくなりました。永年の間に、海岸線が変わってきているのですね。

斎藤館長は、この西部地域はプレートの境界に位置し、世界的にも稀な地域で、この地域を基点に、真近に研究できる素晴らしさを感じているとのことでしたが、私にとりましては、落ち着かず、心配ですが・・・(笑)。

お忙しいなか、ご講演くださいました3人の講師のお話は、ミュージアムを利用なされる皆様におかれましても、ミュージアムを運営する私どもにとりましても、大変示唆に富んだ内容であったと思います。本日のお話を今後の“ミュージアム・リレー”に活かしていきたいと、関係者一同、感じております。



挨拶する岩田館長

この事業に共催してくださいました日本ミュージアム・マネジメント学会関東支部と実践部門の皆様、ご後援くださいました神奈川県博物館協会さま、神奈川県立生命の星・地球博物館の友の会の皆様、神奈川県西部地域ミュージアムズ連絡会の事務局をお引きうけいただいている神奈川県立生命の星・地球博物館の皆様、そして、この会をたちあげてくださいました初代館長の濱田隆士先生、第1走(回)からご参加いただいている星槎学園湘南校さまに、心から感謝申し上げます。

また、この記念行事を開催するにあたり、菅井委員長はじめ協力を申し出てくれた方々の皆様のご尽力につきましても深くお礼申し上げます。

今後とも、このミュージアム・ネットワーク活動をさらに意義のあるものとして、継続するよう努めていきたいと考えておりますので、皆様のご支援、ご協力をお願いいたしまして、閉会の挨拶とさせていただきます。

長時間にわたり、ご静聴いただきまして、誠にありがとうございました。

金湯山早雲寺の歴史と文化

“ミュージアム・リレー” 10周年記念実行委員長
箱根町郷土資料館元館長
WESKAMS協力者

菅井 清登

“ミュージアム・リレー” 10周年記念関連行事～ミュージアムと歴史遺産～の一環として、9月9日、箱根湯本の金湯山早雲寺を訪ねた。ここでは、戦国時代の武将、北条早雲の菩提寺として知られる関東屈指の名刹である。湯本駅から徒歩で約20分、湯本富士屋ホテル裏山の早雲公園に接する閑静な位置にあるが、山門は旧東海道（旧街道）に接する。

当日、ご住職の千代田紹禎師（箱根町文化財保護委員）の解説で、早雲寺の歴史や文化財について学ぶ。幸運なことに、庫裏の広間の床には、連歌師宗祇の座像（土佐光起筆）と宗祇騎馬像（伝狩野永納筆）の二点が並んで飾られており、机には、松尾芭蕉の師、北村季吟の「宗祇二百年忌詩歌集」が展示されていた。ともに早雲寺の寺宝であり、通常は拝見できないものである。数日前に、季吟の子孫の方にお見せしたという説明があり、私たちのために、そのまま展示して置いて下さったようである。冒頭から、早雲寺の文化の奥深さと同時に、住職の心遣いを体感する。

ここで、千代田住職から、まず宗祇終焉の地としての話、次いで小田原攻めの時に秀吉の本陣となった話、茶道史上有名な山上宗二（利休の高弟）惨殺事件のこと、朝鮮通信使の手になる山門の扁額（金湯山）のことなど、早雲寺の歴史的な事項についての説明を拝聴する。そのあと、本堂（方丈）へ移動し、山水図・竜虎図など有名な襖絵群や、伝北条幻庵作という枯山水の石庭の解説を聞く。



枯山水庭園を案内する千代田師

●早雲寺の歴史

早雲寺は、大永元年（1521）、2代氏綱により北条早雲の菩提寺として創建された。3代氏康治世当時の境内は、紫野の本寺を模したという七堂伽藍を備えた本坊と、氏綱の菩提所など十数の塔頭が林立し、一時は、関東における臨済宗大徳寺派の中本山として、鎌倉の名刹をしのぐ、関東随一の大禅刹として発展していた。今日でも、往時の隆盛は、様々な記録や残された書画・文物などから偲ぶことが出来る。

しかし、天正18年（1590）、5代北条氏直治世の時、豊臣秀吉による小田原攻めの拠点（本陣）となる。石垣山一夜城が完成し小田原城が落城すると、早雲寺はそのほとんどを焼失する。

江戸時代に入り、中興の祖といわれる菊径和尚等の努力により小田原藩の公認を得、焼失から37年後の寛永4年（1627）、早雲寺本堂客殿（方丈）が上棟され、早雲寺の復興になる。現在の方丈は、宝暦八年の火災後に再建されたとされるが、襖絵や石庭などは復興時の江戸時代初期の遺構である。

●連歌師宗祇

旅の詩人といわれる宗祇は、文亀2年（1502）、終の棲家と定めていた越後を出発し、美濃への旅に向かった。富士山を見たいという宗祇に、駿河へ戻る弟子の宗長らが同行した。その途中の7月30日、箱根湯本で病のため逝去する。遺骸は、富士山の見える裾野の桃園定輪寺に葬られた。時に82歳であった。早雲寺の宗祇墓は供養塔であるが、そこは宗祇終焉の地と伝えられる、かつての観音堂があった所とされている。なお、その墓の手前には、江戸時代の俳人祇空の墓がある。芭蕉門下其角の弟子で、宗祇を敬愛するあまり、ここに庵を立て、晩年を宗祇の墓守として過ごしたという。

●早雲寺の文化財

国・県指定の重文など絵画・工芸品・書状等が多くあるが、主な物は次のものである

○北条早雲像——国指定の重文である。絹本淡彩で描かれた画像で、早雲庵宗瑞と称した剃髪後の早雲像である。他に、県指定重文の2代氏綱、3代氏康像を含む北条5代の像、墨画淡彩機婦図、枇杷小禽図など多数の絵画がある。

○客殿の襖絵——客殿（方丈）には桃山文化をしのばせる38面の襖絵があり県指定の重文である。

特に、中央「室中の間」の、16面の襖いっばいに描かれた龍と虎が相対峙し、まさに戦わんとする瞬間

間の勇壮な姿の絵は、迫力万点である。

手前の「檀那の間」には、遠山と池、水鳥の遊ぶのどかな田園風景を描いた山水画4面、奥の枯山水の庭に面した「衣鉢の間（上間）」には、乱世を避け商山に隠れ住む老人を描いた、中国の「商山四皓図」6面がある。いずれも、作者・年代は不詳であるが、江戸時代初期の狩野派の流れを汲む画家のものとの説もある。

○織物張文台と硯箱——連歌の会席に用いられたもので、国指定重文である。文台は、各所に数多く残っているが、蒔絵を施したものがほとんどで、織物を張った物はこの1点のみという貴重なものである。なお織物は硯箱にも張っており、早雲寺裂と呼ぶ独特の名物裂が使われている。

また、他の工芸品としては、金の平蒔絵で芹の絵が描かれている「芹碗」が有名である。

○枯山水石庭——北条幻庵（早雲の三男）作と伝えられている。鶴亀の石組や中央の滝石組の豪快さは、江戸初期の大名庭園を思わせる遺構であり、禅宗の借景式庭園の特徴をもつ石庭でもある。

石庭の借景となったその裏山は、早雲寺林と呼ばれていて、シイ・カシ・スダジイなどの照葉樹が繁茂し、箱根町指定天然記念物ヒメハルゼミの神奈川県内唯一の生息地でもある。

●境内の見所

枯山水石庭の裏側に開山堂があり、その手前に宗祇と祇空の墓がある。北条5代の墓はその奥、階段を上った一角の一段高い閑静な場所にあり、早雲寺を訪ねる人の多くが立ち寄る場所でもある。



北条5代の墓の前で

本堂の入口には、紅白の梅、しだれ桜が植えられていて、その中に宗祇句碑（世にふるも さらに時雨の 宿りかな）が建つ。更に、ヒメハルゼミを世に知らしめた歌人・並木秋人の碑（あかときと なくひぐらしに さきかけて 天に流らふ 勤行蟬のこえ）、がある。1匹が鳴くと一斉に鳴きだす習性があり、読経のように聞こえるの意味から、勤行蟬ともいう。



宗祇の墓を見学

中門の左手に、一夜城で秀吉が使ったとされる梵鐘と山上宗二の追善碑が並んでいる。山上宗二は、千利休の高弟で、秀吉の茶頭をつとめたこともあったが、自負心の強い性格が嫌われて畿内を放逐され、諸国放浪して後、北条氏に身を寄せていた。小田原攻めに際し、許されて再び秀吉と対面するが、早雲寺での茶会の折にまたも勘気に触れ、惨殺された。碑は、近年建立されたもので、宗二追善茶会等も行われていた。早雲寺は、まさに歴史と文化の香りに満ちあふれた、ミュージアムそのものであった。

また、早雲寺の本堂（客殿）は、通常拝観謝絶となっており、立ち入ることは出来ないが、7月2週の日曜日の「ヒメハルゼミの声を聞く会」の一日と、11月3日文化の日の文化財デーの2日間は開放される。この日は、解説つきで襖絵等の文化財が拝観できる。

箱根町立郷土資料館の概要

箱根町立郷土資料館

館長 大和田 公一

箱根町立郷土資料館は、箱根の考古・歴史・民俗資料を収集・保管し、教育的配慮のもとに展示公開して、町民の文化の向上等に資することを目的に、昭和58年7月に開館した人文系の登録博物館で、以下の事業を柱に活動を展開しています。

(1) 資料収集事業…箱根山の歴史、文化に関する資料を、町内外を問わず収集する。

寄贈・寄託による資料の収集はもとより、古書市などにも足を運び、箱根関係資料の購入に努めてまいりました。しかし近年は、財政状況の制約などから、購入資料については限度があり、積極的収集を図ることができないという残念な状況となっています。

(2) 資料保存事業…収集した資料の保存に万全を期し、後世に伝えていく。

当館の根幹となる事業です。館の建設計画が立てられた当初は、地域の歴史的財産を収蔵する「庫」を造ることが第一の目的でした。したがって、当館の心臓部にあたる収蔵庫は、資料の品質別に4室に分かれ、それぞれ独立した収蔵環境を維持できるようになっており、工作室や荷捌室など資料保存を目的とした部屋を含めた総面積は、延床面積の26%にあたります。しかし、開館24年を経過した現在、特に民具収蔵庫の容量が限界に近く、新たな収蔵スペースの確保が急務となってきています。

(3) 調査研究事業…箱根に関する考古・歴史・民俗各資料の調査研究を行う。

「街道」「温泉」「生活」という基本テーマを設定し、関連の文献・資料解題や石仏・石塔類の調査を実施しています。これら調査の結果は、調査報告書として発刊し、さらに展示開催や教育普及活動に反映させ、多くの方々に紹介することを心掛けています。

(4) 教育普及活動…各種展示の開催のほか、必要な刊行事業、研究会、講習会を教育的配慮のもとに実施する。

まず展示室は、博物館と来館者を結ぶ最初のステ



説明する大和田館長

ージ、「出会いの場」であると考えています。当館には、200㎡の常設展示室と、100㎡ほどの企画展示室があります。常設展示のテーマは「道」。箱根を通る3本の道（「箱根八里」「湯治の道」「生活の道」）に沿って、江戸時代から明治・大正期にいたる箱根の歴史を紹介しています。

企画展は、開館以来39本の箱根に因んだ展示を開催してきました。近年では、小中学校における地域学習に資することを主旨とした企画展（平成17年度「草《わらじ》鞋」展、平成18年度「HAKONE 1956…50年前の箱根」展）を開催し、これを「学習支援展」と位置付けています。また、郷土資料館の諸活動を写真パネルなどで報告する「アクティヴ・ディスプレイコーナー」や、紙紐で5cmほどのわらじを作る「Workshop ミニわらじを作ろう」も常置して、静的な展示からの脱却を企図しています。

次に当館の特色として、体験学習活動を紹介します。現在箱根町には5校の公立小学校があり（平成20年度に3校に統合）、全校の6年生は、毎年手作りのわらじを履いて、箱根八里の石畳を歩いています。当館では、わらじの材料提供や製作指導、体験歩行時の案内など、全面的に支援しています。このような活動の中から、子どもたちの「わらじ」に関する疑問・質問を集約し、展示という形で表現したものが、前述の学習支援展「草《わらじ》鞋」です。これは、一つの博学連携（協働）の形といえるのではないのでしょうか。

以上簡単に当館の活動概要について述べてきましたが、ここ数年博物館をとりまく状況は決して楽なものではありません。このような中で、地域に根ざし、箱根にとって必要欠くべからざる施設であるという認識を持って頂けるよう、充実した活動の展開に尽力していかなければならないと考えています。

〈講演〉

ミュージアムから見た観光客誘致と 歴史遺産

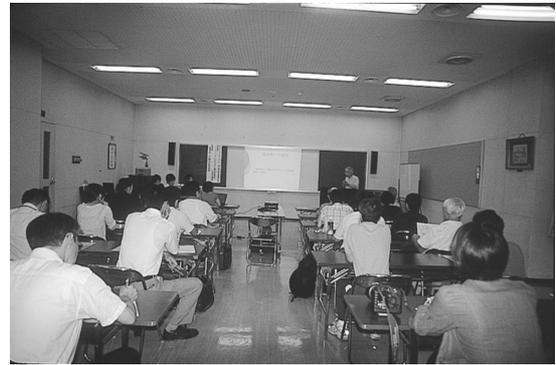
JMMA常任理事・事務局長
実践部門部会長

高橋 信裕

ミュージアム（博物館）が社会教育施設であるとの認識は、「教育基本法」や「社会教育法」を持ち出すまでもないことなのだが、生活者にとっては、実は意外と「教育施設」であるとの認識が薄いのではないだろうか。社会教育施設といえば、図書館や公民館が共に並べられるのだが、教育施設としての認識度は、図書館や公民館に比べ博物館の方は低いように思われる。特に、観光地に立地する博物館は、地域社会における教育・学習施設として、地域住民に受け止められ、日常的に利用されているようには思われない。地元住民にとっては、博物館のコレクションやコンテンツが、自分たちの歴史や存在を証明する重要なアイデンティティであることを理解していない場合が多い。人間に例えるならば、すぐ身近の祖父や祖母、両親、兄弟、姉妹等の存在を認識するに近い「無頓着さ」があるようだ。つまり、あまりにも当たり前な存在ゆえに、その価値に疎くってしまうのではなかろうか。

こうした身近なものへの接し方を、親身になって教授してくれる存在が、「歴史遺産」ではないだろうか。その貴重な価値に気づかされる以前に、すでに自己の縄張りのものとして、日常化してしまっているものを、改めて棚卸しをして、その価値を検証するという行為がもたらしてくれる「歴史遺産」への気づきは、自己のアイデンティティの形成に、とてもよい影響をもたらしてくれる。自己をはじめ、周りの多くのもの、すなわち人間関係はもとより、見慣れた山野や建造物等が、大切な意味を持つものであるとの認識は、同時に自分たちの存在をも貴重なものとして、捉えられる視点をもつことにも繋がっていく。

このような意味で、私たちが今日の午前には訪問した「早雲寺」での歴史遺産体験は、多くの示唆を与えるものであった。当寺には連歌師宗祇の墓があることから、たまたま訪れたこの日に宗祇関連の資料が公開されていたことも幸運だった。北条五代の菩提寺としても、貴重な遺構や文化財が遺されており、千代田住職の案内による襖絵や枯山水庭園等の説明には深く感銘を受けた。やはり、本物の文化との対



講演する高橋実践部門部会長（2日目）

峙は、心身のカタルシスを促す特別な効力があるように感じられた。

現在、博物館の世界では、「博物館法」の改正問題に関連して博物館登録制度や学芸員の養成制度等が問題視されているが、このような現場における利用者へのサービスやもてなしのあり方など、現場の発想を重視した視点での改善策が論点に上がっていないことに、不安を感じた。わが国の代表的な観光地の一つである「箱根」の博物館としては、一見地味に映る「郷土資料館」も、博物館界では人材面でもまたコレクション面でも十分な評価がなされているものの、こうした評価が人員体制や予算編成に反映しないように感じられるのは、地域コミュニティでの理解や支持が、われわれ博物館界の思いや評価との間の差に原因があるのだろう。自分及び自己の周りの人々の繋がりをはじめ、自然や歴史の遺産の価値に気づく“学び”から、外来者を魅了する資源開発の基本があるわけで、その“学び”を先導する中核のコミュニティセンターとしての役割こそが、地域の博物館に求められているのではないだろうか。

博物館の改革を「会議室」ではなく、「現場」から見据えることの大切さを改めて知ることの出来た貴重な“ミュージアム・リレー”の2日間であった。



懇親会場で挨拶する高橋事務局長

事例発表

箱根町への観光振興提案

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス
上山信一ゼミ

総合政策学部 2年	田村	修己
総合政策学部 4年	堀内	香那
環境情報学部 2年	山高	一雄
総合政策学部 3年	吉田	洋基

私達は大学で経営評価のゼミに所属しており、「ミュージアムと都市再生」という研究テーマの下、「箱根町におけるミュージアムを用いた地域再生」という仮説に基づいた調査、研究を行いました。

1. ブランド限界の箱根とミュージアムの可能性

箱根と聞いて思い浮かぶ言葉は何だろうか。今回、我々ミュージアム研究班が現地へ赴いてアンケート調査を行ったところ、「箱根のイメージは？」という質問に対し、多い順に「温泉」21%、「景観・自然」14%、「芦ノ湖」10%という結果となった。なるほど、もともと土地に備わっているコンテンツが箱根のイメージの大半を形成していることが分かる。裏を返せば、箱根が今日まで自然物に頼って、観光産業を盛り立てていたということだ。

しかし、ここ近年、箱根を訪れる観光客数が減ってきている。「統計はこね」という箱根町のウェブサイトによると、平成14年から17年までに箱根を訪れる観光客総数は年平均1%減少している。これは当然年間の箱根観光客による消費額の減少を意味し、その額は年平均13億2千6百万円の減少であり、特に平成17年度は過去最低を記録。これまでの箱根ブランドではもはや限界に達してしまっていると言える。

そんな中、我々は研究テーマである「ミュージアム」に着目した。箱根には、ここ10数年の間に、私立ミュージアムが次々と建設され、現在ではその数、30以上。特に美術館の数は、全国レベルにおいても、箱根が17、上野が4、諏訪が6、と美術館のイメージが強いと思われる他の観光地域と比較しても圧倒的な多さだ。しかし、これら美術館のうち、殆どは企業の税金対策に作られたというのが実情で、各美術館の意識レベル（外部PRや地元住民との交流、教育事業などに対する取り組み）は残念ながら低い。PRに関しては、我々が実施したアンケートでも、「彫刻の森美術館」を除いて各美術館の知名度はかなり低い数値にとどまった。また我々の身近にいる一般学生に「箱根の美術館の問題点は？」という質問を



事例発表を行う上山ゼミ生

外部用にアンケート調査を行ったところ、「広報がいまひとつ」という項目が多かった。しかし、一方で「箱根のイメージは？」という質問に対し、4位に「美術館」が入っていた。これは、個別に名前を挙げるほど認識はできていないが、「なんとなく」箱根に「美術館」というイメージが定着し始めていることを意味する。

2. プロモーション

具体的にミュージアムを使ってどのようなプロモーション活動ができるのか検討していく。

提案①：箱根総合ミニミュージアム

箱根の美術館に関する最大の問題は「広報」がうまくできていない点であり、「…この手の美術館は日本中に散在していて、…住み分けも見えにくい」（アンケート自由記述欄より）とあるように、各館の差別化がなされていない点だ。そこで我々が提案するのが、「箱根総合ミニミュージアム」だ。これは箱根のミュージアム各館がそれぞれコンテンツを持ち寄り、小田急グループの協力のもと、駅やデパートにそれぞれのブースを設ける、という提案だ。現在箱根のミュージアムを統括する組織として「箱根プロモーションフォーラム」なるものがあり、小田急グループも所属している。この機関は統一チケットの作成など主にPRに力を入れているが、この企画においては各館と小田急へのパイプ役を担う形となる。もしも、この企画が「箱根総合ミニミュージアム@新宿駅、小田急百貨店」という形で実現すれば、多大な外部訴求が達成される。また、これにより「箱根ロマンスカー」や「箱根登山鉄道」を使い箱根へ足を運ぶ観光客が増えれば、箱根のミュージアムと小田急グループはステークホルダーの関係となる。

提案②：箱根アーティストバンク

我々がさらに提案したいのが「箱根アーティストバンク」構想だ。これの最大の目的は、若手アーティストの（主に海外）流出を防ぎ、若手アーティストを育成することだ。まずは箱根アーティストバン

クなるものを用意し、若手アーティストはそこに無料で登録することが出来る。箱根町や各ミュージアム、学校がそれぞれの目的にあった（パブリックアート、教育目的ワークショップetc.）アーティストを、審査を経て箱根に招待する。そして、アーティストは箱根での活動する数ヶ月の期間、衣食住を旅館・ホテル・行政・企業からある程度サポートしてもらい代わりに、箱根での活動を通して地域にアートという成果物を還元するという相互利益な仕組み（アート・イン・レジデンス）だ。注目すべきはアーティストが箱根で活動することで、箱根の自然や温泉といったコンテンツからインスピレーションを得て、箱根アーティストとなることだ。友人に「箱根アーティスト」がいれば、箱根に足を運ぶ人も増えるだろうし、箱根における新しい「アートな」ブランドイメージが確立する。

3. 箱根連携ボード

第2部で示したような提案があっても、個々のプレイヤーがきちんと連携、機能しなければこれらは実現しない。第3部では、箱根における健全な連携ボードを探る。

まず、箱根同様にミュージアム群が存在し、連携体制が進んでいると思われる台東区上野を引き合いに、箱根と比較する。上野には、ミュージアム統括組織として、「上野の山文化ゾーン連絡協議会」なる組織があり、参加団体は上野にあるミュージアムを中心に23団体あるが、一番の特徴は行政が音頭とりをし、各団体をまとめていることだ。主な仕事は、事務所機能、定例会の主催、共同マップの作成や、東京メトロとの合同企画など様々だが、最も重要な役割は参加団体同士の橋渡しとして機能するクレジットを有していることだろう。国立ミュージアムの独立行政法人化により、意識レベルの変化や寄付の必要性、企業との協賛が促された中、行政が企業、芸術大学などとの橋渡しとして機能した影響は大きい。また、行政による「予算」も魅力的だ。

ただし、行政による取りまとめには限界があるのも事実。あくまで公の機関であるため、全体を平等に巻き込んだマクロなプロジェクトが中心となるからだ。その限界をこえるために、箱根について新たな形態の連携ボードのあり方を考えてみた。

第2部でも少し述べたが、箱根にはミュージアムを統括する組織として「箱根プロモーションフォーラム」がある。前身は私立ミュージアムのみの組織だったが、次第に規模が大きくなり現在では小田急グループや行政、宿泊施設、私企業も参加している。

目的は各プレイヤーが相互に連携しながら、具体的取り組みを展開し、箱根の集客力を高めることなのだが、箱根の場合、行政が上野の場合とは異なり、今のところはオブザーバーとしての参加にとどまっている。

もともと、土地の「自然」への依存度が高い。そして連携が苦手な体質の箱根観光産業である。行政の取りまとめは必須だ。勿論、役場の予算は上野の場合のように潤沢ではない。しかし、外部との機関と連携をとるときは必ず行政を通しての方が事はスムーズに進むだろう。例えば、箱根近辺には（芸術）大学が皆無だ。そういう連携を図る場合にも行政が窓口になればスムーズだ。行政が果たす役割は大きい。

結びに

昨今、地域連携が各地で騒がれているが、箱根もその例に漏れない。観光産業の伸び悩みを打破するために箱根は、今こそ潜在的实力を有すミュージアム群を有効活用すべきだ。そのことがひいては、箱根ブランドをも再構築していくことにつながっていくだろう。

この文章は平成19年9月9日、“ミュージアム・リレー”10周年記念行事にて発表した内容から作成しました。以下に発表会での箱根町観光協会の方を始めとした多くのミュージアム関係者からのご意見、ご感想の概要を書き足しておきます。

- ① 「箱根の実情が良く捉えられた鋭いプレゼンテーションだった」（箱根町観光協会）
- ② 「ミュージアムについてなのか、美術館についてなのかカテゴリーが曖昧だった」（東京大学院生）
- ③ 「海外の事例は必ずしも箱根の実情とは合致したものではなく、あまり参考にならないのでは」（千葉教育庁）

以上のようなご意見・ご感想をいただきました。

「ミュージアムと美術館のカテゴリー」に関しては正確な定義をしないままプレゼンテーションを進めたため、混乱を招いたことはこちらの至らなところでした。「海外の事例」に関しては、もっともな意見で、あくまで参考にする程度、と考えていただければ幸いです。ここにはとても書ききれませんが、その他多くの、ありがたいご感想・ご意見を頂きました。

最後に、イベントの参加を呼びかけてくださったJMMA常任理事・事務局長の高橋信裕氏にこの場を借りて感謝の意を表したいと思います。

“ミュージアム・リレー” 10周年記念行事

千葉県教育庁教育振興部文化財課
主任文化財主事 **新 和宏**

はじめに、神奈川県西部地域ミュージアム連絡会(Weskamus)“ミュージアム・リレー”10周年のお祝いを祝す。加えて、この記念すべき10周年をさらに価値ある足跡とするために、記念講演会及び“ミュージアム・リレー”120走事業が成功裏に終了したことを御祈念するとともに、その記念すべき場に同席することができたことを感謝したい。

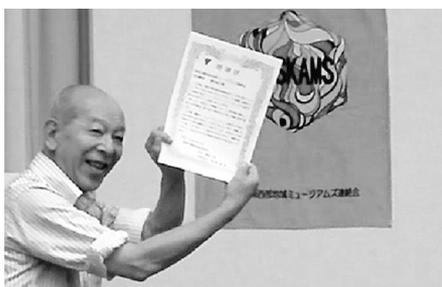
今回、同記念行事に参加した件に関して、その感想等を執筆する機会を得たので、当行事の感想と併せて、いくつかの意見を提起したい。

1. 記念すべき10周年記念行事に参加して

平成19年9月8日(土)、神奈川県立生命の星・地球博物館において開催された同行事は、午前中に行われた博物館主催の特別展「ナウマンゾウがいた! ~温暖期の神奈川~」の展示解説会にはじまり、午後の記念講演会、そして、箱根湯本富士屋ホテルに場所を移しての懇親夕食会と、正に“ミュージアム・リレー”を象徴するような“共通の意識を持った人のリレー(輪)”が作り上げた成果であった。

最初に、菅井清登実行委員長、倉本昌昭JMMA関東支部長、濱田隆士特別顧問の挨拶を経て、「ミュージアムの魅力~ミュージアムをより楽しむために~」を統一テーマとした記念講演会が開催された。

講師である文部科学省生涯学習政策局社会教育課地域学習活動推進室長栗原祐司氏、東京大学大学院教育学研究科・教育学部准教授鈴木真理氏、生命の星・地球博物館長斎藤靖二氏は、同テーマを三者三様の切り口で展開するとともに、豊富な知識と経験、独創的かつ学術的な検証、そして何より聴講者の心を引きつける話術と相まって、3時間という時間を感じさせない豊かなひとときを提供してくれた。



感謝状に喜ぶ濱田隆士特別顧問

さあ、“ミュージアムの魅力”と一言で括っても、その魅力を形成する媒体により、魅力をアピールする手法も内容も、さらには必要経費等までも異なってくる。言うに及ばずこの媒体は、学芸員、資料、展示手法、講座等をはじめ、ミュージアムショップ(グッズ)、食事(質、価格等)、建物景観、利便性等々…、非常に多岐に渡る。しかし、共通することは、いずれの媒体を介在したとしても、“いかにミュージアムを記憶するか”がキーワードになることである。言い方を変えると、この記憶を形成する“きっかけづくり”を担うことができるのがこれらの媒体であるということである。

講演者3氏は、この“きっかけづくり”の素材として、ミュージアムグッズ、学びの不思議と楽しさ、地域の自然や文化遺産を事例として話を進めた。

当然のことながら、これらは博物館側が持てる能力を結集して利用者に提供すべき事象であり、それを可能にするのが、博物館の専門職である学芸員の存在であることは自明の理である。



ミュージアムグッズの魅力を紹介する栗原氏

翌9日(日)は、同行事の関連事業として、名刹早雲寺、及び、箱根町立郷土資料館を巡り、同資料館において、JMMA常任理事・事務局長の高橋信裕氏の特別講演、慶應義塾大学生による「箱根町への観光振興提案」と題した研究発表があった。

今回のような博物館同士の連携事業を実践する場合、単に参画施設の見学や講座等に参加するに止まらず、地域を象徴する素材(自然や歴史、文化、文化財、さらには、まちを構成する人間模様)に直接触れることにより、“地域の再発見”“郷土愛の喚起”と言った意識の育成に連鎖することが可能となる。

学生による研究発表は、地域の活性化、及び、まちづくり等に関連した事項を、学生、若者という新しい視点として捉えた内容であり、若干のシミュレーション過程で構成不足の観があったが、データ収集、その検証等において魅力ある提案であった。

従来、事例として良く提案されていた地域主体の人材が、地域の魅力を創出する事業展開ではなく、別の視点（ポジション）からのアプローチというのが新鮮であり、地域としても一つのたたき台として、協議していけるのではないかと考える。

千葉県においても、博物館という一つの枠に囲まれた狭隘な範疇ではなく、地域（フィールド）全体を学びの場とするフィールド・ミュージアム事業を展開している。そして、その基盤にある使命は、正にこれら素材の利活用と、この利活用により創出される地域の活性化、加えて、何よりもこうした事業を展開していく際の、企画側、及び、学ぶ側の意識喚起の助長と、そのための人材育成である。



2日目の事業（早雲寺の見学風景）

2. ミュージアムの魅力を何処に求めるか…

①利用者側から見て…

博物館の利用者は、博物館の何処に魅力を感じるのだろうか。

前述した各種の媒体をとおして、知的な満足度を得た時、新しい何かを発見した時、それに感動した時、その博物館を象徴するようなグッズに出会った時、博物館自慢のフルコースに至高の味を見つけた時、憧れの学芸員に会った時？…等々。

つまり、人は日常的な事象とは異なる何かを体験した時にそのもの自体から魅力を感じ取り、それが“記憶”へと昇華する。

これらの記憶を誘因することができれば、博物館の使命は大半成功していると言える。

それでは、何をどう提供すれば良いのか…。

②博物館側から見て…

利用者側の知的要求に対して、発見する喜びと、感動する喜びを、気づき、考えさせる過程を踏んだ手法で提供できれば良い。そのためには、博物館側がその手法を取り入れた事業展開を実践しているかが重要となる。

博物館側が心がけることは、それらを提供する際

に、少しのきっかけ作りと、気づき、考えるためのアドバイスをするだけで、それ以上の情報提供は行わないことである。

つまり、情報提供は重要だが、全てを提供するのではなく、利用者側に、気づき、考える“間（ま）”という時間を提供することこそが必要なのである。この“間”が博物館においてモノと対話することであり、何かを発見し、感動を得ることに結びつく。

お気づきのように、我々学芸員は、“知”へのアドバイザーであり、コーディネーターとしての能力も併せ持つことが重要なのである。

3. モノと対話するとは？

今回の“ミュージアム・リレー”120走で見学した特別展「ナウマンゾウがいた！ ～温暖期の神奈川～」は、藤沢市より発見された一頭のナウマンゾウを主人公に展開していくストーリーであり、その資料の豊富さはもとより、学術的に裏付けられた研究成果を基盤とした構成、そしてそれらを知識として伝えていく館側のインストラクター能力、併せて、展示の工夫も相まって、非常に分かりやすく、地域を再発見する上でも魅力ある展示であった。



“ミュージアム・リレー”第120走
特別展「ナウマンゾウがいた！」を解説する樽学芸員

昨今の博物館においては、学芸員の研究成果を史実や各種データ、及び、その解釈（検証）のみを展示物として提供するだけではなく、我々を取り巻く様々な課題・問題等について、博物館としての課題提起やメッセージ性をストーリーの中に包含することが期待されている。

そして、今回の展示においても、地球規模で繰り返される環境問題について、ナウマンゾウを素材としてアプローチしている。

このように博物館側が設定したテーマについて、学芸員と利用者が相まみえる時、学芸員の能力として必要不可欠とされる、先のインストラクター能力をはじめ、インタープリター能力、ファシリテータ

一能力が、適時、展開していけることが必要である。

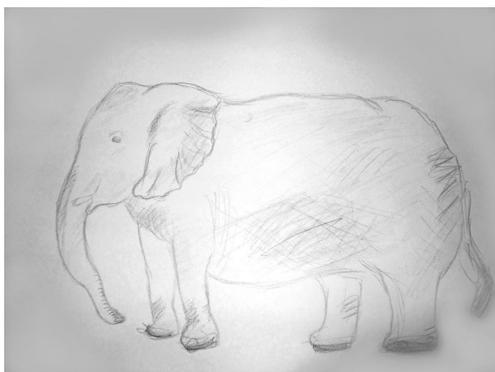
その際、学芸員は、利用者がモノと対話することができるように展開していかなければならない。

利用者はモノ（資料）と対峙し、それが語る言葉を聞くことにより、気づき、考える“間”を得る。

私は、モノの見せ方について、学生たちに講義する際、また、ピアレビューを行う際、この展示の主人公でもあるゾウを良く素材として取り上げる。多くの博物館では、同資料の情報を提供する際、解説文であれ、口頭説明であれ、学名、産出地、時代、類例・分布、生態等を一様に列記し、解説していく。しかし、ゾウの骨格で一番重要視すべき点（気づいてほしい点）について解説している例は極めて少ない。それは言うまでもなく、特徴的な鼻部の存在である。幼児であってもゾウの絵を描く際、必ず表現するこの鼻部は、骨格の段階では想像できない部分である。もし、アフリカゾウ等の現生種が存在していなければ、幼児はもとより、古生物学者であっても、骨格からあの鼻部を復元することは難しい。

であるならば、何故、このような特徴的な部分を“気づき、考えるためのきっかけ作りの素材”として活用しないのだろうか。

公用文のように決まり切った解説文で詳細に情報提供することも展示手法の一つではあるが……、私なら、次の一文だけの問いかけをしてみたい。この問いかけ一つでも、充分「きっかけ作り」を演出することができるはずである。



娘の描いたゾウの絵 (Ayano S)

—

「これはナウマンゾウの全身骨格です。

さあ皆さん、生きているゾウを想像してください。何か不思議に感じることはありませんか。」

—

こう問いかけられた見学者は、少なくとも、生きているゾウを想像し、脳裏に映像化した現生種と眼

前の骨格を比較する、そして…、と言ったモノを観察する行為に出る。人により時間の長短はあるが、この観察こそがモノと対話する“間”であり、多くのことに“気づく”ことにつながる。

逆に、規定の解説文だけの場合は、次のような課題を生む。一つは、長文の解説文を敬遠し、読む行為まで到達しない。今一つは、読む行為に出たとしても、その文章を読破したことで満足し、理解したと錯覚してしまう例である。この場合は最悪で、読む行為に熱中するばかりに、肝心のモノ（骨格）は見えていない例が多い。

特に、学校団体の見学方法に関しては、このパターンに加え、必死になって解説文を写す行為に時間を費やす。これは学習の手法が筆記による調べ学習の形式（設問形式のワークシート）になっているからであり、必死になって文章を写している子ども達の様子は博物館で良く見受けられる光景である。

当然、展示の相乗効果を上げるためにも、どちらかに偏倚するのではなく、解説手法に抑揚を付けることが重要であることは、当学会員であれば御理解いただけることと考える。

重要なことは、博物館事業が学芸員の研究成果の公開の一つであるのと同時に、利用者にとっては、何かを発見し、感動を得る場である、ということをお忘れてはならない。そして、そのためには、博物館の利用と、モノと対話する手法について、学芸員が普及・啓発、指導する立場であることも自覚すべきである。

今回、Weskamus 記念行事と、その関連事業に2日間参加させていただき、かねてより当連絡会、及び、その各種事業に興味を持っていた私としては、事務局はもとより、参加者の皆様と有意義な時間を共有できたことを喜びとしたい。さらに、Weskamusの足跡や実績を我が身、我が県にも反映させていきたいと強く心に刻むことができた。

当論考は、事業の感想と併せて若干の持論展開を行ったが、紙面の関係もあり、理論不足が免れない部分もあったことは自覚している。

よって、これらについては、近々、別の紙面をとおして提言していく計画である。

その際には、博物館関係者、文化財関係者、教育関係者、関連業者の方々、そして、利用者の方々と、ぜひ、積極的な議論を展開していただけることを期待している。

10周年記念の“ミュージアム・リレー”に参加して。

JMMA理事 川津 尚一郎

10年、120回。よくぞここまで来たものである。

2006年1月の100走達成記念、そしてこのたびの10年・120走記念の“ミュージアム・リレー”に立ち会うことができ一ファンとしてお礼とお祝いを申し上げる次第である。

神奈川県西のミュージアムを中心に緩やかな連合体WESKAMSが結成されたのはその前にさかのぼるそうであるが、結成から間をおかずが始まったメンバーのミュージアムが持ち回りで行う“ミュージアム・リレー”は一回の休止もなく毎月1回続けられてきた。

WESKAMSには会長も存在しなければ会費もない、といわれているが、創設を主導された神奈川県立生命の星・地球博物館の初代館長濱田隆士先生の掲げられたコンセプト、理念がWESKAMSと“ミュージアム・リレー”に今も脈々と継続されているように見受けられる。

筆者は7～8年まえから“ミュージアム・リレー”のファンとして、年に数回は参加させていただいている。おかげさまで箱根、小田原を中心としたミュージアム群のかなりの数を制覇することができた。

かつてイベントの専門家を自認していた筆者にとって、このような地味なイベントが10年も続いているという事実は、まさに驚異的なことにみえる。特定の専門家に委託して運営しているのではなく、関係者の手作りの運営であることを見てもしつこいようだがよくぞここまで続いたものだと感嘆するばかりではない。各メンバーの規模にもよるが、毎回のリレーの募集人員は30名から50名程度であり、筆者の参加した限りでは毎回募集人数を上回った参加者でにぎわっている。それに、どういうわけか、前日までどんな悪天候であってもイベント当日はいい天気なのである。参加者が少ないことと、天気が悪いことほどイベント実施者をつらさせることはない。これを見ても“ミュージアム・リレー”はよほど良い星の下に生まれているな、とうらやましい。

リレー参加ミュージアムと企画内容は、年度当初に発表され、それぞれのミュージアムは十分に準備して参加者を迎えている。100回ともなると、多くのミュージアムが何回もリレーの舞台となっている。

しかし、舞台は同じでも毎回違った企画や切り口での解説・見どころを提供してくれるので、同じミュージアムに何度行っても飽きることはない。

筆者のようなすれっからの半素人はともかく、ミュージアムを愛してやまない一般オーディエンスにとって、学芸員のレクチャ付きでの見学などの特別な鑑賞機会はそれほど多くはない。特に、二宮町にあるフリースクール星槎学園湘南校の校外学習として“ミュージアム・リレー”への参加を早くから受け入れ、教育効果に大いに貢献していることは注目される。10周年記念のセレモニーの中で、星槎学園湘南校の生徒代表からWESKAMSに感謝状が贈呈されていたのが印象的である。

言いだしっぺが濱田先生だったこともあり、WESKAMSの事務局は10年間一貫して神奈川県立生命の星・地球博物館に置かれている。中心人物は本会理事でもある同館学芸員の奥野花代子氏がこれとずっと続けていらっしゃる。奥野さんは加盟館園のバリアフリー化対策やボランティア養成、さらには館運営そのものに対する指導助言などにもかかわられているとのこと。そんな訳で「奥野さんに頼まれたら嫌とは言えない…」という多くの奥野シンの各ミュージアム職員や協力者と呼ばれるOBの各位がこの10年を実質的に支えてきたと言っていい。

晴れやかな10周年式典と記念講演会、湯本富士屋ホテルで行われた懇親パーティーも10年間“ミュージアム・リレー”を支え続けてきたメンバーで組織された実行委員各位の手作りであった。ありがとうございました、そしてご苦労様でしたと申し上げるとともに、今後200走、また20周年に向けてますます充実した“ミュージアム・リレー”を提供して下さるようお願い申し上げます。



司会を務める奥野さん
(生花は星槎学園湘南校からのお祝い)

“ミュージアム・リレー” 10周年記念事業に参加して

小田原城天守閣
学芸員 湯浅 浩

2007年9月8日(土)、9日(日)の2日間にわたり、神奈川県西部地域ミュージアムズ連絡会(WESKAMS)主催による“ミュージアム・リレー”10周年記念事業が開催された。“ミュージアム・リレー”については、博物館同士の連携事業の側面や地域住民の生涯学習の場としての側面から、これまでも様々な形で紹介されてきた。

さて、筆者に与えられたテーマはいわゆる記念事業の参加記である。残念ながら初日しか参加できなかったため、初日の雰囲気だけでもお伝えできればと考えている。

初日の記念講演会は、神奈川県立生命の星・地球博物館のシアターを会場に開催された。定員300名の会場に満席とは言わないが、若い星槎学園湘南校の生徒さんから、高齢者まで様々な年代の人々が集った。参加者の半数以上は、日頃“ミュージアム・リレー”や地球博物館の活動に参加されている一般の方々であったように思う。また、受付や会場設営には、WESKAMS会員館園の有志があたり、この記念事業を支えた。

菅井実行委員長、倉本JMMA関東支部長の開会挨拶の後、濱田WESKAMS特別顧問が登壇しWESKAMSに対する思いが述べられた。そのほとんどは星槎学園湘南校の生徒さんに向けられたものである。代わって、星槎学園湘南校の校長先生と生徒さんが登壇し、WESKAMS並びに濱田氏に感謝の辞を述べた。星槎学園湘南校は授業の一環として“ミュージアム・リレー”を取り入れており、“ミュージアム・リレー”開始当初から生徒たちが参加している。今回、星槎学園湘南校とWESKAMSはお互いに与え与えられる存在であることを改めて確認する機会となった。

引き続き、栗原祐司氏、鈴木真理氏、斎藤靖二氏から講演をいただいた。栗原氏は秘蔵?のミュージアムグッズコレクションを次々と披露され会場は大いに沸いた。鈴木氏はその軽妙な語り口が会場をなごやかにさせた。斎藤氏はパソコンを駆使され、特に大陸移動の姿を時系列で紹介された場面では会場

がどよめいた。そもそも、WESKAMSの記念講演会には常に「ミュージアム・エデュテインメント(博物館楽修)」というテーマが掲げられているが、今回の各講演も間違いなく楽しく学べる講演であった。

記念講演会を終え、会場を湯本富士屋ホテルに移し、関係者による「懇親夕食会」が開かれた。来賓の小田原市長、箱根町長を含め70名近い方が参加されたと思う。さて、筆者が知る限りこうした場での参加者全員による自己紹介が恒例となっている。今回も「夕食懇親会」の時間の大半は自己紹介の時間である。これもWESKAMSの特徴のひとつと言えなくもない。こうして、初日の記念事業は楽しくそしてなごやかに終わりを告げた。

ところで、筆者はこの10年の間、近からず遠からずWESKAMSに接し続けてきた。記念すべき10周年にあたり、何故これまで“ミュージアム・リレー”が毎月欠かさず継続されてきたのかを私見として記しておきたい。

まずは、事務局の奥野花代子さんの存在。恐らく関係者一同異論のないところだろう。次に、地域の特性を活かした活動である点があげられよう。神奈川県西部地域は博物館の密集地帯であり、50の館園が連携し易いのは確かである。また、狭い地域で活動を展開することは、地域住民の参加を容易にし、多くのリピーターを生み出してきた。更に、同じ事業を継続することによるマンネリ化が危惧されるが、各館園が特別展の開催時期を選んでリレーを実施するなど工夫を施すことで、マンネリ化を防ぐ努力をしている点も見逃せないであろう。

そうこうしているうちに紙幅が尽きた。初日の雰囲気がお伝えできていなければ、それはひとえに筆者の筆力不足であり、御寛恕を願うばかりである。



実行委員のメンバー（左端が筆者）

「ゆるやかさ」の魅力 ～“ミュージアム・リレー” 10周年記念行事に参加して～

林原自然科学博物館 展示普及部
井島 真知

「ミュージアムの魅力」とは何だろう？開館準備中の博物館に勤める者として、どんな博物館が魅力的かと考えることは多い。雰囲気がいい、展示がおもしろい、一緒に行った人と話がはずむ、何か新しい発見がある、グッズが楽しい…いろいろとあると思う。今回の記念講演会で、また新しいミュージアムの魅力が見つかったらいいな、との思いで参加した。

午前中は講演会に先立って、地球博物館で開催中の特別展「ナウマンゾウがいた！」の展示解説があった。これは“ミュージアム・リレー”120走目のプログラムでもある。講義室で話を聞いてから、展示室での解説という内容だ。次のリレー先の美術館の説明の後、学芸員さんの話が始まった。博物館が標本を収集し、調査・研究してこそできる展示だという話もあった。博物館が何をしているところかを人々に知ってもらえばなお、その魅力も伝わることだろう。ナウマンゾウの分布もついて、この展示で初めて提示したという仮説の紹介もあって、調査・研究する博物館の姿を感じることができた。

この“ミュージアム・リレー”の第1走目から、星槎学園湘南校の生徒たちが続けて参加していることは、以前から耳にしていた。この日も、十数名の生徒が参加しており、いかにもその年頃らしく、仲間どうしで、楽しそうに話をしながら、展示を見てまわっていた。彼らがミュージアムにいることを自然体で楽しんでいる様子は印象的だった。

自然体で参加できるというのは、この“ミュージアム・リレー”を行なっている各館園にもあてはまることかもしれない。「同じ地域のミュージアムで、新しいミュージアムのあり方を探っていこう」と課題を共有しつつ、その中でいろいろな試みができる自由が保証される「ゆるやかさ」が、各館園の魅力を引き出すことにつながっている。館種や規模、設立母体も異なる50もの館園が参加してのリレー事業である。各館園に無理がかかっては、10年も続くのはむずかしいだろう。博物館関係の学会や会合では、館種が違う、規模が違うということで、なかなか共

通の課題で話ができず、もどかしく思うこともある。箱根という観光地を含む、特に多種多様な館園がある地域で、共通の課題のもとに事業のネットワークが維持されていることはすごいと思ったし、この「ゆるやかなつながり」の維持のコツについて、もっと知りたいなと思った。

午後の講演会では、博物館と利用者関係について考えさせられる言葉が多かった。「送り手の意図と受け手がずれてもいいのが社会教育の魅力」というのもそのひとつだ。博物館の人間として、私たちはある意図をもって博物館（展示）をつくる。博物館が研究していることに関連して「これを伝えたい」という思いがあるし、それを伝える努力をしてこそ博物館が存在している意味もあると思う。しかし同時に、それをどう受け止めるかは利用者によっても、また同じ人でも時と場合によって違うことも認めておかなければならない。博物館は、ずれを埋めることばかりを考えがちだが、それだけが課題ではない。もう少し「ゆるやかに」考えてもいいのだろう。他にも、「人と人との交流があって、はじめて教育が成り立つ」という言葉もあった。人が単なる知識、技術を伝える媒介として存在するのではなく、人としてそこにいることが大切だという意味だったと思う。博物館が受け手の意図とのずれを受けとめるとき、そして「人としてそこにいる」ことが出来たとき、魅力的な博物館が生まれるのではないだろうか。自分の館ではどんな風にそれが出来るのか、その方法を具体的に考えていきたいと思った。



「記念講演会」会場風景

“ミュージアム・リレー” 10周年記念行事に参加して

JMMA会員
東京大学・大学院 教育学研究科
鈴木真理研究室

大木 真徳

神奈川県西部地域ミュージアム連絡会（以下、連絡会）の主催する“ミュージアム・リレー”10周年記念行事に参加する機会を得た。この行事は、平成19年9月8日（土）・9日（日）の2日にわたって開催され、8日には神奈川県立生命の星・地球博物館を会場に講演会が、9日には早雲寺ならびに箱根町立郷土資料館の見学と慶応義塾大学の学生による研究発表が、それぞれ実施された。

8日の講演会では、「ミュージアムの魅力 ～ミュージアムをより楽しむために～」というテーマのもとに、3人の講師からそれぞれ興味深い講演がなされた。講演会の後に開催された、関係者による懇親会も終始和やかな雰囲気で行われ、有意義な時間を共有させていただいた。また、会場となった湯本富士屋ホテルには、参加者の宿泊にも便宜をはかっていただき、10周年記念に相応しい素晴らしい環境を提供していただいた。懇親会に参加した方々の顔ぶれを拝見していると、設置主体や館種などの別を問わず、神奈川県の西部地域にあるさまざまな博物館が連絡会に参加し、連絡会を介して相互に連携している様子が改めてわかった。連絡会の活動目的は、“ゆるやかなつながりを基本としたネットワークを活かして、ミュージアムの相互の理解と親交を深め、市民の生涯学習の支援と地域文化の発展に貢献する活動を展開する”ことであるという。10年に及ぶ連絡会の活動の成果が、博物館や博物館に関わる人々の、まさに“つながり”として着実に根付いていることを伺い知ることができる懇親会であった。“ミュージアム・リレー”が持つ事業としての意義は、そうした“つながり”を形作る具体的な場として機能してきたことにも求められるのだと思う。

博物館界で“連携”の必要が喚起されるようになってから久しい。現在の博物館を取り巻く環境には厳しいものがあるだけに、単館での取り組みの限界を補完し、さらに多様な活動を展開していく場とし

ての可能性を持った、連絡会のようなアソシエーションの持つ意義は今後もさらに増していくのだろう。また、“ミュージアム・リレー”のこれまでの活動の様子を伺うと、博物館関係者に限らず、広く地域の方々からの参加と理解を得ていることにも注目される。“評価”といった言葉に象徴されるように、博物館の活動成果に対する見方に厳しさが増すなかで、博物館に対する良き理解者を地域に増やしていくことが求められている。こうした観点から、連絡会、および、“ミュージアム・リレー”の果たしてきた役割を捉え返していくことも可能なだろう。

9日には、ご住職の案内のもと、早雲寺を見学し、寺宝を特別に拝観する機会にも恵まれた。また、箱根町立郷土資料館の見学の後には、慶応義塾大学の学生から「箱根町への観光振興提案」と題し、箱根町の観光振興に博物館が果たす役割とその可能性について独自の調査結果に基づいた発表がなされた。博物館関係者に加え、地元の観光協会の方の参加も得て、発表の後には忌憚のない意見が交わされた。博物館に興味を持ち、さらには、博物館への就職や、博物館に関わる研究を志すような学生にとって、実際に博物館で働く現場の方々から直接意見を伺える機会はなかなか得難いものに思う。こうした機会が、ミュージアム・マネジメント学会の理解も得て、今後一層増えていくことを期待したい。

今回、こうした10周年という節目の行事に共に参加する機会を得て、関係者の方々のこれまでのご尽力の大きさに改めて頭の下がる思いになった。ひとつの事業を10年にもわたって継続させることのご苦労は傍からは計り知れないものと思う。これまでに築き上げてきた“つながり”のもとに、今後もこの取り組みが着実な歩みを進めていくことを期待したい。



懇親会の風景

掲示板

「これからの博物館の在り方に関する緊急合同フォーラム —考えよう！博物館の未来—」 の概要報告と特集予告について

高橋 信裕 (JMMA理事)

博物館に関係する3学会（日本ミュージアム・マネジメント学会、全日本博物館学会、日本展示学会）の合同フォーラムが、この12月16日（日）、北ノ丸の「科学技術館」において開催された。3学会の合同主催によるフォーラムは初めてのことで、テーマは、今年6月に「これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議」から報告された「新しい時代の博物館制度の在り方について」の提言を受け、①「21世紀における博物館の在り方」をはじめ、②「博物館登録制度の問題点と対策」、③「大学における学芸員養成課程の現状と課題」が、重点的に取り上げられた。フォーラムの目的は、博物館に関係する学会として、課題の理解認識を深め、将来への展望を描くとともに、広く一般会員や市民にも討論の場を公開し、課題の共有化と深耕を図ることにあった。

基調講演は、わが国の地域の博物館行政を政策面、財務面から深く関わる官庁関係者から、現状と課題について解説していただいた。講師の岡本全勝氏は、内閣府の現職の官房審議官だが、それ以前には総務省の総務課長や徳島県、鹿児島県、富山県で財務担当部課長を務められる等、地方行政の現場で文化（博物館）財源の予算査定等に携わってこられた実質的な地方の行政（今回の場合文化行政）を左右する立場にあった。氏からは中央政府から地方自治体に出向した官僚の博物館への取り込み姿勢や評価の仕方が、生々しく報告された。特に、「文化行政がなぜ教育委員会所管でなければならないのか。首長部局であれば、もっと予算がつくのだが」、といった指摘は、地方自治体での予算編成の権限が首長に集権されており、人事権も予算編成権も持ちえなくなっている地方自治体の「教育委員会」の非力さを鋭く突いたものとして受け止められた。

この後、文部科学省の立場から社会教育課の栗原祐司室長による「今後の博物館制度の在り方」が報告された。栗原氏は、文科省きっての“博物館事情通”として知られた方で、博物館法に規定されている博物館登録審査と認可事務について、その権限が機関委任事務から自治事務に移行している現状と地方分権との関係、また同じ社会教育法の下にある図書館法とのバランス（博物館法のみを突出した形で取り上げられないなど）、博物館法改正へのインセンティブが国会関係者に強く働かない（問題が国民の生命、財産を脅かすものでもなく、改正への要求にも国民的盛り上がりがないなど）といった理由などから、同法の改正は難しいのではないかと懸念が報告がなされた。

これらの基調講演や報告を受けて、3学会の会長による討論が行われた。

3会長のなかでも、「これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議」の委員を務めた全日本博物館学会長の鷹野光行氏は、生涯学習社会の実現に向け、国家を挙げて取り組もうとしてきている現状に博物館行政サイドは有効な施策をとろうとしていない、として文科省の取り組み姿勢に失望感を露にした。

JMMA（日本ミュージアム・マネジメント学会）会長の大堀哲氏は、地方都市における博物館の存在意義と価値について、博物館を地域経済の活性化に寄与する観光産業のインフラの一つとして位置づける視点を強調し、その政策実現を付託されている首長部局所管の博物館も「登録博物館」に認可されるべきだと自説を説いた。また、大学での学芸員養成課程についても、大学教員のレベルの低下を指摘し、大学そのものの改革も迫られている旨の発言があった。

日本展示学会の端信行会長は、大学での教職コースに博物館活用についての内容が設けられる必要性について触れ、大学生の博物館体験が現状では、あまりにも貧困であり、大学教育の中で、博物館の利用法や利便性について、もっと多くを伝え、教員自身に博物館が身近に意識されるようなカリキュラムの提言がなされた。また、わが国の博物館が欧米の博物館と異なり工作部門を持たない体制に触れ、このことが、わが国の博物館の展示への取り組み姿勢にマイナスに影響していることなどが発言された。

以上、大まかにフォーラムの報告を行ったが、詳細は、次号の会報で特集として会員諸氏に報告する予定である。近年にない、実質のともなういいフォーラムであったことを、あらかじめ伝えておきたい。

i n f o r m a t i o n

◆文献寄贈のお知らせ

- ・雄松堂出版『図書目録2007』
- ・東海大学出版会『海のふしぎ「カルタ」読本』
- ・文部科学省大臣官房政策課『新しいデジタル文化の創造と発信（報告書）』
- ・21世紀の科学教育を創造する会『21世紀型科学教育の創造Ⅳ』
- ・昭和館『昭和館館報 平成18年度』

お詫びと訂正

前号の会報に掲載いたしました事務局の新しい電話番号に誤りがございました。
ご迷惑をおかけしてしまい、誠に申し訳ございませんでした。
謹んでお詫びしますと共に、訂正の告知をさせていただきます。

JMMA事務局 新電話番号 **03-3521-2932**

u o i t e w r o j u
i n f o r m a t i o n

新規入会者のご紹介

【個人会員】

高橋 武俊 慶應義塾大学
野呂田純一 (財) かながわ国際交流財団
築瀬 大輔 群馬県立歴史博物館

【学生会員】

川畑 亮子 立教大学大学院

(五十音順・敬称略)

JMMA 会報 No. 46 (Vol. 12 No. 3)

発行日 2007年12月30日

事務局 〒136-0082 東京都江東区新木場2-2-1 2F TEL/FAX 03-3521-2932

編集者 高橋信裕、齊藤恵理、川瀬伊代、津久井真美 e-mail: kanri@jmna-net.jp